三重県埋蔵文化財調査報告　22

多 気 郡 明 和 町

古里遺跡発掘調査報告

―― D 地 区 ――

1 9 7 4
三 重 県 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は、三重県が国庫補助金の交付をうけて、三重県教育委員会が調査主体となって実施した多気郡明和町大字竹川・古里遺跡D地区の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制で行なった。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当者　山　沢　義　貴（三重県教育委員会文化課）

谷　本　鋭　次（　　〃　　）

3．発掘調査後の遺物整理および報告書作成は谷本が行なった。

4．発掘調査にあたっては明和町教育委員会および明和町立斎宮小学校には種々ご援助を得た。

また、中川栄之助氏をはじめ地元牛葉、竹川、金剛坂部落の方々の協力を得た。

5．本書の遺構標示は下記の略記号による。

ＳＢ；竪穴住居址、掘立柱建物址

ＳＤ；溝　　址

ＳＫ；土　　坑

ＳＥ；井　　戸

ＳＸ；墳　　墓

6. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言 …… 1

Ⅱ　遺　　構 …… 2

Ⅲ　遺　　物 ……10

Ⅳ　プロトン磁力計による磁気探査 ……17

Ⅴ　結　　語 ……18

表　目　次

第１表　竪穴住居址の規模…… 4
第２表　掘立柱建物址の規模…… 6
第３表　遺構別遺物一覧表…… 16

図 版 目 次

ＰＬ１　古里遺跡位置図
　　古里遺跡地形及小字名図
ＰＬ２　古里遺跡発掘区配置図
ＰＬ３　Ｄ地区平面図
ＰＬ４　ＳＢ75・80　ＳＢ～85実測図
ＰＬ５　弥生時代土器拓影　飛鳥奈良時代土器
ＰＬ６　飛鳥奈良時代土器
ＰＬ７　飛鳥奈良時代土器
ＰＬ８　平安時代　鎌倉時代土器
ＰＬ９　鎌倉時代土器
ＰＬ10　鎌倉時代土器　和鏡
ＰＬ11　磁気探査地点および測定値表
ＰＬ12　発掘区近景
ＰＬ13　ＳＢ60　ＳＢ83・84・85
ＰＬ14　ＳＢ80　ＳＢ54
ＰＬ15　ＳＸ77　ＳＸ２
ＰＬ16　ＳＤ68・71　ＳＤ42・43
ＰＬ17　弥生時代土器
ＰＬ18　飛鳥奈良時代土器
ＰＬ19　飛鳥奈良時代土器
ＰＬ20　飛鳥奈良時代　鎌倉時代土器
　　和鏡、石斧
ＰＬ21　鎌倉時代土器　墨書土器
ＰＬ22　鎌倉時代土器

Ⅰ　前　　言

昭和45年にはじまった多気郡明和町竹川字古里、同中垣内に所在する「古里遺跡」の調査は今年度で５年目をむかえた。これまでの試掘調査、Ａ～Ｃ地区の調査に於いて、古里遺跡は10万㎡以上におよぶもので、弥生時代から室町時代にいたる県下でも有数の大規模な遺跡であることが判明した。

Ａ地区（1,200㎡）、Ｂ地区（5,000㎡）、Ｃ地区（3,000㎡）と合計9,200㎡の調査を進めてきたが、まだ遺跡の10分の１に満たない面積である。弥生時代竪穴住居址１戸、古墳時代方形周溝址４、飛鳥・奈良時代竪穴住居址７戸、掘立柱建物址16棟、鎌倉時代大溝、溝址多数、井戸等の遺構が検出され、遺物としては多数の各時代の土器とともに祭祀用の土馬や蹄脚硯、各種施釉陶器、宋銭などがある。土器の中には当地域で作られたものの他に愛知県で製作された陶器、更に舶載の青磁、白磁などもある。

掘立柱建物址、各種施釉陶器、硯、土馬などの出土より、古里遺跡は単なる中世村落のみではなく、奈良時代に属する官衙的性格も考えなくてはならなくなり、東方の斎王宮跡との関連が注目され出した。

昭和48年度の調査は11月より12月にかけて約40日間にわたって行なった。調査対象地区はＢ、Ｃ地区の北方200ｍの個所で、台地が大きく西に突き出す部分のやや北側である。Ｂ地区との中間には塚山１号墳が、又東南方100ｍには塚山２号墳がある。標高12ｍを測り、すぐ下の水田との比高は３ｍである。発掘面積は約2,300㎡におよんだ。発掘区画の呼称については全て前年度までの方法に準じて行なった。

今年度の調査に於いても、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長・坪井清足氏、三重大学教授・服部貞蔵氏、名古屋大学考古学研究室助教授・楢崎彰一氏には種々ご教示を得た。明和町教育委員会、明和町立斎宮小学校にも種々ご配慮を頂いた。記して謝意を表したい。

また、１月の斎王宮跡の発掘調査に先立ち、大阪府教育委員会の協力を得て、プロトン磁力計による磁気探査をＢ・Ｃ地区の中間点で行なった。その結果はⅣに於いて報告したい。

II 遺　　構

調査面積2,300㎡の範囲に於いて検出した遺構には多数の溝址、土坑、住居址、井戸等がある。これらは従来の分類に従えば弥生時代、飛鳥、奈良時代、鎌倉時代前半に分類される。古墳時代、平安時代、室町時代と考えられる明らかな遺構は認められない。今年度のＤ地区の調査に於いても、前年度までの地区同様多数の柱穴、溝址、土坑等が検出されているが、遺物の出土がなかったり、位置関係が不明であったりして、それらを系統的に関連づけられれものは少ない。

今回の調査区では全体に地山は黄茶褐色を呈するやや粘質なものであるが、西側部分ではやや低くなり、拳大の礫が多く含む層が露出した地山となっている。一方、北東部分の大きな土坑を見ると、黄茶褐色土の下は砂粒を多く含む白色砂質土となっている。黄茶褐色土は約50cm程度である。また、南側部分の井戸ＳＥ40では黄褐色土の下は80cm程度の砂礫層があり、その下は灰色がかった砂層がつづいている。

1　弥生時代の遺構

ＳＤ21　発掘区の北端部で発見。幅北側で105cm、南側で130cm。長さ5.5ｍ、深さ25cm。長軸の方向はＮ36°Ｗを指す。埋土は黒色で、北端部上層で壺形土器が出土。

ＳＤ37　ＳＤ21の南方40ｍの個所で検出。ＳＤ21に比べてやや細く、幅60cm、長さ５ｍ。深さは北側は浅く22cm、南側で35cmを測る。南側部分より比較的多数の弥生時代の土器片が出土している。又、大形石斧が一点出土している。

ＳＸ77　ＳＤ37の東方14ｍ。弥生時代後期の壺形土器が倒置した状態で出土。この土器の下の地山は径60×75cm、深さ17cmの楕円形の土坑であった。(ＰＬ15)

2　飛鳥奈良時代の遺構

発掘区全体にわたって見られる。竪穴住居址11戸、掘立柱建物址15棟の他に土坑が多数ある。竪穴住居址はいずれも方形に近いものが多く、最小10㎡より最大17.5㎡までのものがある。長軸の方向も雑多である。ＳＢ83、84、85のみが重複している。全ての住居址には他の新しい時代の溝、小穴が重複している。地山上面よりの掘り方はいずれも浅く、10cm程度のものが多い。カマ

ドは殆んどの住居址に見られ、東壁にある。

一方、掘立柱建物址は３間×４間のもの１棟、２間×４間のもの２棟、２間×３間のもの４棟、２間×２間のもの４棟、不明のもの４棟がある。柱穴は比較的大きな径80cm程度のものより、30cm以下の小さなもので、やや並び方が不揃いのものがある。土坑は北側部分に多い。いずれも楕円形を呈する。他の時代の遺構が重複している。

○竪 穴 住 居 址

ＳＢ12　発掘区の北側部分で検出。掘立柱建物址ＳＢ50、89が重複している。北東、南西側の壁は明確であるが、他の二方の壁は不明瞭である。深さ数cmと浅い。柱穴は認められない。少量の土師器が出土している。

ＳＢ14　発掘区の西側部分で検出。全体の形は長方形で、新しい時代の溝、小穴も多数重複しており、どれがこの住居址に伴うものか不明である。ただ住居址の四隅には径30cm、深さ25cmの小穴が見られ、この小穴はこの住居址に伴うものと思われる。東壁のやや東よりにカマドがある。周溝は見られない。

ＳＢ15　ＳＢ14のすぐ西南側で発見。ＳＢ14より一回り小さく、正方形に近い。方向は同じである。掘立柱建物址ＳＢ49と井戸ＳＥ57が重複している。カマドの部分には新しい時代の土坑が重複しており不明である。

ＳＢ22　今回発見した竪穴住居址の中で最小のものである。一辺3.1ｍの正方形に近い。掘立柱建物址ＳＢ88及び新しい時代の溝、土坑が重複している。

ＳＢ23　ＳＢ22のすぐ南東側で検出。ほぼ正方形を呈する。柱穴が四本認められる。東壁の南よりにカマドの痕跡がある。新しい時代の溝に削平されてしまったものであろう。少量の土師器が出土している。

ＳＢ36　弥生時代溝址ＳＤ37のすぐ西側部分で検出。１辺４ｍ前後の小形の住居址である。ＳＢ23同様東壁南寄りの部分にカマドがある。柱穴は認められない。土師器甕、高杯、杯等が出土している。

ＳＢ60　発掘区の南端で発見。長方形を呈する。掘り方は16cmと浅い。三方の隅に楕円形の土坑が見られるが、この住居址に伴うものかどうか不明。(ＰＬ13)

ＳＢ67　ＳＢ23の東８ｍの個所で発見。正方形を呈する。柱穴は明瞭でない。張床をしており、床面は固い黒色土であった。その下は浅い土坑と溝であった。多数の土師器が出土しており、張床の下からも少量の土師器が出土している。

ＳＢ83　発掘区の東南隅で発見。ＳＢ84、85と重複している。正方形を呈し、主軸はほぼ東西南北を指す。掘り方は20cm。北西側に一部分周溝が残る。４本の柱穴も明瞭に認められる。カマドはＳＢ84によって削平されてしまったようである。(ＰＬ４・13)

ＳＢ84　ＳＢ83の南東に重複して発見。やや南北に長い長方形を呈し、南北4.0ｍ、東西3.2ｍを測る。東壁にあるカマドの南部分は鎌倉時代の溝ＳＢ86に切られている。（ＰＬ４・13）

ＳＢ85　ＳＢ84の東側で、ほぼ正方形を呈するものと思われる。南側がＳＢ84同様ＳＢ86に切られている。柱穴、周溝は認められなかった。ＳＢ83・84・85の住居址からは多数の土師器甕、甑、杯等が出土している。（ＰＬ４・13）

以上の他にＳＢ14のすぐ西で一辺5.6ｍの竪穴住居址かと思われるものがある。しかし、内側は平坦でなく、高低差が20cm近くあり、遺物の出土もなく一応除外した。

ＳＢ	規　　模	深　さ	長軸方向	カマド位置
12	4.3×4.8m	10cm	N 53° W	—
14	3.8×5.0	16	N 42° W	東
15	3.6×4.4	12	N 42° W	—
22	3.0×3.8	20	N 62° W	東
23	5.2×5.4	20	N 60° E	東
36	3.7×4.4	15	N 42° W	東
60	3.5×4.8	16	N 58° E	東
67	4.5×5.0	—	N 43° W	—
83	5.0×5.0	27	N — S	東
84	3.4×4.1	30	N 36° W	東
85	—	17	N 43° W	—

第１表　竪穴住居址の規模

○掘立柱建物址

—３間×４間—

ＳＢ80　発掘区の東側部分で発見。今回調査した掘立柱建物址の中で柱掘り方が一番しっかりとしたものである。一部ＳＢ75と重複している。棟方向は東西を指す。柱間は桁行、梁行ともにほぼ等しい。柱掘り方は径60cm。深さは四隅は70cmと深く、他は40cmと浅い。このＳＢ80の西寄りの部分から脚脚硯の破片が出土している。すぐ東のＳＢ87も柱穴はやや浅いがＳＢ80とよく似た規模のものと思われる。（ＰＬ４・14）

—２間×４間—

ＳＢ78　ＳＢ80のすぐ西南側、今回の調査に於いて最大の規模のものであるが、柱の掘り方は径40cmと小さく、深さも15～30cmと浅くその並び方も不揃いである。棟方向はＮ34°Ｅ。北西側の柱穴は新しい土坑によって削平されている。

ＳＢ89　ＳＢ23の竪穴住居址に重複して検出。ＳＢ78同様柱堀り方は小さく径40cm、深さ30cm程度で西南部分が新しい溝址が重複して不明。ＳＢ78に比較して梁行が狭い。

―２間×３間―

ＳＢ49　発掘区の西南隅で発見。東西棟の建物で、南側の柱穴はＳＤ16によって削平されている。柱掘り方は径50cm、深さ30cm。このＳＢ49の南部分に重複して、棟方向に並行して走る柱列が見られる。柱掘り方は径70cm、深さ30～40cm。

ＳＢ50　ＳＢ89のすぐ北側。発掘区の北端部近くで検出。柱掘り方は径70cm、深さ30～40cmとＳＢ89に比較してしっかりとしており、並び方も良い。東隅の柱穴は削平されてしまっている。

ＳＢ54　発掘区のほぼ中央、ＳＢ50の南12ｍ。棟方向はＳＢ50とほぼ同方向であり。柱掘り方の径、深さもかわらない。(ＰＬ14)

ＳＢ81　発掘区の東南部分、ＳＢ83の西８ｍの個所。東南側の柱穴は新しい溝によって削平されてしまっている。柱掘り方は径35cmと小さい。棟方向はＳＢ78にほぼ直交する。

―２間×２間―

ＳＢ88　発掘区の北側部分、ＳＢ50の西６ｍ。正方形に近いが僅かに東西方向が長い。柱掘り方は径50cmと大きく、深さ30～50cm、柱の並び方も良い。ＳＢ22に重複する。

ＳＢ73　ＳＢ80のすぐ西で検出。２間×２間の建物の中で最大のものである。棟方向はＳＢ54とほぼ同じである。柱掘り方は径30cm程度と小さく、深さは20～30cm。東南部分は削平されている。

ＳＢ79　ＳＢ60の北６ｍの個所。ＳＢ73同様柱掘り方は径30cmと小さく、柱の並び方も不揃いである。

ＳＢ57　発掘区の西南部分、ＳＫ20のすぐ北である。不整形な土坑、柱穴が多数重複しており、柱穴の掘り方は明瞭ではない。径30cm、深さ40cm程度で、棟方向はＳＢ79と同一である。

ＳＢ	規　模	棟方向	桁　行	梁　行	柱間寸法	
					桁　行	梁　行
49	3×2	N70°E	5.2 m	4.3 m	1.7 m	2.25m
50	3×2	N42°E	5.75	3.8	1.9m	1.9
54	3×2	N46°E	6.3	3.7	2.1	1.8
57	2×2	N57°W	3.7	3.5	1.85	1.75
65	—×2	N52°W	—	4.5	—	2.25
73	2×2	N43°W	4.8	4.4	2.4	2.2
75	—×2	N38°E	—	3.1	1.6	1.6
78	4×2	N34°E	7·5	4.6	1.85	2.3
79	2×2	N54°E	4.2	3.8	2.1	1.9
80	4×3	N84°E	7.0	4.8	1.75	1.6
81	3×2	N64°W	4.65	3.65	1.55	1.8
87	—×2	N63°E	—	4.0	—	2.0
88	2×2	N59°E	4.2	4.1	2.1	2.0
89	4×2	N63°E	7.6	3.5	1.9	1.75
90	—×2	N77°W	—	4.5	—	2.25

第２表　掘立柱建物址の規模

—そ　の　他—

いずれも発掘区域外にまたがって見つかっているため、その規模は明確ではない。それらの中ではＳＢ87は梁行２間でＳＢ80同様の大きな規模の建物と思われる。またＳＢ75、65の梁行２間の建物も柱掘り方がしっかりとしたもので、ＳＢ75の堀り方は方形を呈している。他に西端部で検出した梁行２間のＳＢ90がある。

○土　坑・溝　址

ＳＫ44　発掘区の北端部、弥生時代の溝址ＳＤ21の東３ｍの個所である。幅2.2ｍ、長さ４ｍの楕円形の土坑で、それに直角に幅1.3ｍ、長さ4.7ｍの溝址が交わった状態である。深さ50cm。出土遺物には土師器甕、高杯、杯、須恵器蓋等がある。

ＳＫ62　ＳＫ44の東６ｍの個所、一部発掘区の外へ拡がる。ＳＫ44同様幅３ｍ、長さ４ｍ、深さ50cmの楕円形の土坑である。土師器甕、高杯、須恵器杯が出土。

ＳＤ39　発掘区の南端で検出、南北に走る溝である。幅1.5ｍ、深さ70cmのＶ字形を呈する。鎌倉時代の溝ＳＤ38・42が横切っている。土師器甕、杯が出土。

この他に少量であるが、この時代の遺物を出土している土坑にはＳＢ50とＳＢ89の間にある住

居址かもしれないとしたものにつづく不整形な土坑がある。またＳＢ73の南西側に径３×3.2ｍの楕円形の土坑ＳＫ69がある。更にＳＢ80とＳＢ87との中間にも不整形な小さな土坑が見つかっている。

3　鎌倉時代の遺構

この時期の遺構は発掘区全体にわたって見られる。その多くは溝址である。そして、それらは複雑にからみあっている。数条の浅い溝が並行して走るものや、断面が浅い台形を呈するもの、あるいは深いＶ字形を呈するもの等がある。これら溝址の中では北西部より南東部に向って走る溝と、それに直交する溝が中心的なものである。一方、土坑も多い。中央を横切る溝より西側で多数の方形の土坑が見つかっている。そのうちの一つからは土師器鍋、灯明皿とともに和鏡も出土しており、墓坑とした。この他にも不整形な円形、楕円形を呈する浅い土坑がある。更に井戸も多数見つかっている。

○溝　　址

ＳＤ６・７・24～26・68・71・74　発掘区の北西隅から南東隅につづく溝である。これらは北西側ではＳＤ６・７・24～26と５条認められ、南東側ではＳＤ68・71・74と２～３条となるが全体に深くなる。遺構としてこれらは連続しない個所もあり、その上、これらを横切るＳＤ27・28・70等の小さな溝もある。しかし、これらの溝はいずれも並行して走り、中でも北西部についてみると、ＳＤ６とＳＤ24～26は幅、深さともその規模はよく似ており、その外側にやや浅く幅広いＳＤ７・ＳＤ91が並行して走っている。また後でのべるいくつかの溝がこれらに直交した状態で検出されている。

ＳＤ６・24は幅70cm、深さ30cmで中央部までつづく。その外側のＳＤ７は幅1.5ｍ、深さ22cmで南西側の傾斜がゆるやかである。このＳＤ７は北側ではＳＤ８に、中央部でＳＤ17・18につづくようで、ＳＤ６より更に12ｍほど南東へのびる。その部分よりＳＤ71がはじまる。ＳＤ71は幅60cm、深さ40cm、更にその北東側にはＳＤ68が並行する。ＳＤ71の延長部分ではＳＤ74となる。ＳＤ74は幅1.8ｍ、深さ45cmと全体に大きく深い。(ＰＬ16)

ＳＤ８・17・38　それぞれＳＤ７より直角に南西にのびる溝である。この三条の溝はほゞ15ｍ間隔で並行してのびる。ＳＤ８は発掘区の北西部分、ＳＤ７に比較して狭く、幅60cm、深さ10cm。ＳＤ17は幅80cm、深さ42cm。途中に一段深い土坑がある。やゝ方向を異にするＳＤ16・18と交叉する。ＳＤ16・18は鉤形に折れるが同一の遺構と思われる。ＳＤ16は幅90cm、深さ15cm。ＳＤ38は幅120cm、深さ20cmで、井戸ＳＥ40の部分で二条に分れている。ＳＤ18とＳＤ７に並行して走る

やや深いＵ字形を呈するＳＤ32がある。これらの溝からは土師器鍋、灯明皿、山茶椀、常滑焼壺等多数が出土している。

ＳＤ68　発掘区の東部分を区画するように北東から、南東へ直角に曲がる幅広い溝である。幅1.6ｍ、深さ20cm程度。南東部分ではＳＤ74と交叉して不明瞭となる。一方、北西部分では幅50cm、深さ20cmの狭いＳＤ55・56が交叉している。ＳＤ55はＳＤ18の部分までつづいている。

ＳＤ４・86　いずれも幅90cm、深さ40cmのＶ字形を呈する溝である。ＳＤ４は発掘区の西部で、ＳＤ86は南東部で検出しており、その距離は60ｍ離れている。しかし、その形態は全く同一である。ＳＤ４はＳＤ８に並行しており、ＳＤ86は延長13ｍを検出し、途中でくの字に折れる。飛鳥奈良時代の竪穴住居址ＳＤ84・85を切り込んでいる。土師器鍋、灯明皿、山茶椀等多数が出土している。

ＳＤ42　発掘区の南側部分で検出。幅西部で100cm、東側ではやや狭く80cm。深さ25cm。ゆるやかにカーブを描く。この溝は北側では傾斜が急であるが、南側はゆるやかである。少量の山茶椀、灯明皿の破片が出土している。(ＰＬ16)

以上の他に多数の不規則な溝が見つかっている。例えば先に述べたようにＳＤ６やＳＤ７を横切るＳＤ27・28・59がある。また井戸ＳＤ40につづくＳＤ41や、ＳＤ４に交叉する浅く幅広いＳＤ３等がある。

○墓　　坑

ＳＸ２　発掘区の北西隅部分で検出。1.0×1.4ｍの方形を呈し、長軸はＮ45°Ｅを指す。深さ40cm。表面は黄褐色粘質土であるが、墓坑の底部は砂礫層となる。坑内からは土師器鍋、灯明皿とともに和鏡、宋銭の破片が出土している。(ＰＬ15)

ＳＸ５・10・11・13　ＳＸ２のすぐ南側、ＳＤ８に並行して検出。ＳＸ２に比べて細長く、深さも一段と深い。径1.8×0.8ｍ、深さ80cm程度のものが多い。長軸の方向はいずれもＳＸ２と同方向である。遺物の出土はない。

ＳＸ９・29・30・31・33・59・92・93　前者同様の細長く深い土坑である。しかし、長軸の方向は前者と直交する。そして、これらはＳＤ７の南西側に並行して検出された。ＳＸ29は二個が重複している。前者同様殆んど遺物の出土は見られないが、ＳＸ30からのみは灯明皿片と青磁片が出土している。

ＳＸ19　今までのものとやや離れて、発掘区の南西部分、ＳＢ91に重複して検出。2.4×1.0ｍの方形で深さ25cmとやや浅く、全体の形はＳＸ２に似る。長軸の方向はＳＸ９等と同じである。遺物の出土はない。

○土　　坑

溝址同様、各所で不整形なものが見つかっている。その上、他の遺構とも重複しているものが多い。発掘区の南西部のＳＫ20は一辺3.4ｍの方形を呈し、深さ25cm。山茶椀、常滑焼の破片が多数出土している。またＳＢ78に重複して、幅広く浅い土坑ＳＫ76がある。径3.5×７ｍ、深さ25cm。ン数の土師器鍋、山茶椀、常滑焼の破片が出土している。他に発掘区の北端部にＳＫ61が、南側では溝状のＳＫ72等不整形な楕円形、溝状を呈する土坑が見られる。多くは少量の山茶椀片や土師器鍋、灯明皿の破片が出土している。

○井　　戸

合計７個見つかっている。いずれも径１ｍ前後の円形を呈する素掘りのものである。黄褐色粘質土の下の砂礫層および砂層は崩壊しやすく、その上、既にこれら砂質土が埋っており、掘り進むことが出来なかった。土師器鍋や灯明皿、山茶椀の破片が出土している。

III 遺　　物

1　縄文時代の土器

いずれも小片である。1は口縁部下に凸帯がめぐるもので器厚6㎜。淡褐色を呈する。2は口縁端部が幅広い凸帯で、押しつけられたようになり、その下は二段の縄文が施されている。茶褐色を呈する。縄文時代晩期のものであろうか。

2　弥生時代の土器

3・4は口縁部の破片で、大きく開く口縁部の端部には沈線がめぐり、1の上端は指による押えが見られ、2では箆による刻目がつく。口縁部内側には幅広い浅い沈線が三条めぐる。表面は無文で1には一部刷毛目がのこる。いずれも赤褐色を呈し、胎土には細砂を多く含む。

5～8は頸部より肩部にかけての破片である。3・4同様赤褐色を呈し、表面は平滑に仕上げられている。箆による深い沈線が施される。6は沈線の下に刻目の施される凸帯がめぐる。

9～14は櫛描沈線が施される壺形土器の破片である。9～11は横線文、12はそのあと縦方向の波状文が、13は太い横線と波状文が施される。14は肩部の沈線の上に櫛描の孤状が見られるものである。15・16は箆描沈線の間に箆による格子目や櫛描横線と扇形文を描く。

17～20は甕形土器である。17は口縁部に刻目をもち、胴部に刷毛目が施される。18には条痕文が、19には櫛目文が施される。20は口径17㎝。黒褐色を呈し、無文のもので口縁部に押えが見られる。

24～26は無文の壺形土器である。24は黄褐色を呈する。細砂を含むもので、表面は磨滅している。25は口唇部を欠くのみのほぼ完形のものである。頸部は細く、胴部は長く最大径は下位にある。全面縦方向の刷毛目が施され、そのあと胴下半部を横方向の箆研磨によって消している。26は口径18㎝、器高34㎝の大形品で口縁部は真すぐ外方に開く。胴部は球形で、器厚は5㎜と薄手である。

以上の弥生式土器は今回の調査の出土遺物の中では僅かな量である。1～6は前期新の段階に比定される。7～20は中期の前半のもので、21～23の底部も中期の壺形土器と思われる。24～26は後期初頭のものであろう。

3　飛鳥奈良時代の土器

—土　師　器—

甕A（34～42）　口径16cm前後、器高20cm前後で、口径と胴部最大幅はかわらない。口縁部はゆるく外反し、中央部が僅かに肥厚するのが普通である。まれに頸部が直立するものや、口唇部は尖り気味に直立するものがある。胴部は球形で、底部は丸底である。口頸部はヨコナデされ、胴部は全面縦方向の刷毛目が施され、内面はナデツケあるいはヘラケズリされている。いずれも茶褐色を呈し、細砂を含むものである。

甕B（27～33）　Aに比較して大形品である。口径18cm、器高20cm以上。口縁部および口唇部の形状はAとかわらない。胴部は非常に長く、底部は丸底に近い。表面は全面縦方向の刷毛目が施され、底部近くのみ横方向の刷毛目である。内面は口縁部より横方向の刷毛目が施されるもの、そのあとナデツケあるいはヘラケズリされるものがある。胎土、色調は前者とかわらない。

甕C（43～45）　口頸部の形状はいままでのものと殆んどかわらない。胴部は大きく球形になり、胴部最大幅は口径より大きい。調整法は前者とかわらない。この種には大小はないようであり、甕Aよりひとまわり大きい。

甕D（47・48）　甕というより鉢に近い器形である。口径が器高より大きい　口縁部が前述の甕と殆んどかわらないもの、頸部のくびれがゆるいものがある。調整法は前者とかわらない。

カマド（46）　器高32.5cm、径は上部で24cm、裾部で43cmの大形品である。焚口幅38cm、高さ20cmで8cm程度の幅の廂をもつ、焚口の両端は幅6cmの脚状になり、後中央にむかってゆるく下がる。把手はやや前方に一対つけられている。器厚1.2cmの厚手で、上端部は幅2cmに厚く内側に平坦にまげられている。表面は全面縦方向の刷毛目が施されている。裾部はヨコナデされる。内面は全て横方向の粗い刷毛目が施され、そのあと、縦方向にケズリとっている。

甑（49）　口径24cm。下半部と把手を欠く。底部より口縁部まで真すぐのびる。器厚は8mm程度である。表面は全面縦方向の刷毛目が施される。この刷毛目調整はまず粗い刷毛目を一旦全面に施したあと、上半部に細かい刷毛目を施している。内面は横方向の粗い刷毛目のあと、胴下半部を縦方向にヘラケズリしている。

杯A（50、51、54、66、67）口径16～19cm、器高5～7cm。50、51、54は口縁部がゆるやかに外反し、底部は平底である。口唇部より2～3cmはヨコナデし、それより下はヘラケズリされている。内面は磨滅して暗文は不明である。66も同様の調整法であるが、内面には放射状の暗文が施される。67は平坦な底部をもち、前者のように口唇部は外反しない。口径18.5cm、器高5.6cmの大形で、表面は全面ヘラ研磨され、内面には斜方向の暗文が施される。茶褐色を呈する。

杯B（52、53、55、56～60）　いずれも口縁部が内弯して、底部は丸底に近い平底をもつものである。口縁部はヨコナデされ、底部は指による調整がなされ、粘土の継目痕をのこすものがある。細砂を含み、淡い褐色を呈するものである。

杯C（68、69）　杯Aに高台のつくものである。杯Aに比べ口径はやや小さい。68は表面は横方向のヘラ研磨がなされ、高台部分はヨコナデされる。内面には斜方向の暗文が見られる。69は全面ヨコナデされる。暗文はない。いずれも黄褐色を呈する堅緻な土器である。

皿（61～65）　61～63は口径20cm、器高3cm前後のもので、底部は平坦もしくはあげ底気味になる。口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリされる。63には暗文が施されるが、他は不明。64、65はややとがり気味の丸底のもので、前者同様、口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリされる。内面には暗文が見られる。いずれも赤褐色を呈する。

蓋（70～72）　70、72は口径17cm前後、器高3cm前後。つまみは中央部分がやや高くなる逆台形を呈する。天井部分はヘラケズリされ口縁部はヨコナデされている。71は大形のものと考えられる。つまみは前者同様で、天井部も同様にヘラケズリされる。

高杯（73～75）　いずれも脚部がラッパ状に開くものである。73は脚上部の破片で、ゆるい面取状になり、裾部分はヨコナデされる。74は口径15cm、器高10cm、杯部は浅く3cm程度、全面ヨコナデされる。脚部は73同様面取状となり8面となる。黄褐色を呈する。75はやゝ小形品で口径11cm、器高7cm。杯部は74同様であるが、脚部の面取状は認められない。

—須　恵　器—

杯蓋（76、77、82～86）　76、77は口径13cm前後で、いずれも天井部はヘラ切りのままのものである。82、83は口径11cm、宝殊のつまみをもつもので、内面にかえりがつく。天井部はヘラケズリ。84～86は口縁端部が下方に折れまがり、扁平なつまみをもつ。天井部は前述のものと、同様ヘラケズリされている。

杯身（78～81、87、88、90）　いずれも底部はヘラ切りのままのものである。79、80は口縁部が僅かに内弯するが、他は外反する。

台付杯（91～93）　91・93は口径17cm前後で口縁部は高台部分よりすぐ外方に真すぐ立ちあがる。これに対し、92はやや小さく、高台も小さく内側につけられている。いずれも緻密な粘土をつかった土器である。

壺（89）　口縁部は歪んで平坦でないが、ゆるく内弯し、肩部分で大きく張り出し、底部へつづく。底部はヘラ切りのままである。全体に器厚3mm程度の薄手である。

硯（94、95）　94は脚部径22cmの円面硯の破片である。裾部が直立し、凸帯がめぐる。内傾する脚部には幅6cmの長方形の透しが2cm間隔にあけられている。黒っぽい青灰色を呈し、細砂を含む。95は蹄脚硯の脚部分の破片である。脚裾部の径29cm。下端部は幅3.5cm、厚さ1cmの板状

で、その上に断面三角形で、下端で幅３cm、上端で幅１cmの三角形の脚が内傾して立つ。脚の上端部近くに幅３mmの凸帯がめぐる。脚部の内面および下面はヘラケズリされている。黒っぽい青灰色を呈し、胎土には細砂を含んでいる。

4　平安時代の土器

この時期の土器は非常に少ない。その出土の多くは包含層の出土である。時期的には平安時代前半のものと、末葉のものとがある。

鉢（96）　飛鳥奈良時代の項で甕Ｄとした系統をひくものである。口径26cm、器高12cm。口縁部中央がやゝ肥厚して、ゆるく外反する。底部は丸底のようである。口縁部は内外ともヨコナデ、頸部は指による押えが見られ、胴中央部より下は細かい刷毛目が施される。全面煤が付着している。内面は横方向の刷毛目のあと、下半部を横方向にヘラケズリしている。胎土は緻密で肌色がかった褐色を呈する。

杯（97）　口径18cm、器高２.８cm。口縁部が直立し、底部は平坦で、厚手である。口唇部は丸く肥厚する。口縁部はヨコナデ、底面は指による調整で凹凸がある。黄褐色を呈し、胎土は緻密である。

高杯（98～100）　98は口径17cm、器高７cm。杯部はやゝ深い丸底の皿状で、脚部は細くくびれ、裾部は径10cmに大きくひろがる。口縁部と脚部はヨコナデ、杯底部は押えによって凹凸がある。内面もナデツケされており、煤状の有機物が付着している。99、100は高杯の脚部分の破片と思われる。裾の径はそれぞれ10cm、12cm。全面ヨコナデされ、99の内面には刷毛目が施されている。いずれも胎土は緻密である。

甕（102）　口径22cm。口唇部が丸く肥厚し、内側が沈線状となる。頸部は内傾して立つ。胴部は球形になるものと思われる。口縁部はヨコナデ、胴上半部は指による横方向の押えによるナデツケで凹凸が見られる。白っぽい灰色を呈し、細砂を含んでいる。全面煤が付着している。

灰釉椀（101～104）　101は上部に吹きこぼれたように灰釉が施される椀の底部破片である。高台は外に向ってつけられ、径８cm。黄色っぽい灰色を呈している。103は口径16cm、器高５cm。口縁部は器厚４mm程度の薄手で、底部は1.2cmと厚手である。口唇部にはヘラで押えこんだ輪花が５ケ所施されている。口縁部１～２cm程度の幅に弧状に灰釉が施されている。高台の内部には糸切痕がのこる。白っぽい灰色を呈する。104は鎌倉時代の山茶椀を小形化した形で内面に釉が見られる。糸切りのあと三角形の高台を貼付けている。

5　鎌倉時代の土器

鍋 A（106・107・110・111）　口径30cm、器高17cm前後のものと、口径20cm、器高10cm前後のものの大小２種類ある。両者とも口唇部が内側に折り曲げられる。前者はナデツケによって折り曲げられた先端が尖り気味に立ちあがる。後者は丸く押えつけられている。頸部はゆるく折れる。胴部は大きく張り出し、口径より一廻り大きい。口縁部および頸部はヨコナデ、肩部および胴上半部はヘラあるいは指によるナデツケ、押えによって凹凸がある。胴下半部は全面横方向のヘラケズリされる。このヘラケズリは内面にもほゞ同じ範囲に施されている。大形品の胴下半部には煤が付着している。胎土には細砂を多く含む。

鍋C（105・109）　口縁部が受口状で、口縁内部が段状となる。口唇部はナデツケで押えつけられる。頸部より胴部に真すぐつづき、肩部はない。胴下半部で稜を有し、底部は丸味をおびる。口縁部はヨコナデ、胴部は押え、底部は内外ともヘラケズリされる。煤が全面に付着している。胎土は鍋Ａとかわらない。105には三本の脚が胴胴部より肩部にかけての部分につけられている。脚は取り付け部分で径４×３cmの楕円形で、先端部では径1.5cmの円形となり、長さ14cmをはかり、上部の本体に比べ高いものである。109には脚があったかどうかは不明である。

鍋D（108）　直立した頸部に、短かく外反する口縁部をもち、口縁部上端は押えつけで平坦となる。頸部は幅２cmで中央部がやゝ肥厚する。肩部は口頸部にくらべ薄手で、全面斜方向の細かい刷毛目か施される。黒褐色を呈し、胎土は緻密である。

灯明皿（112～118）　口径８cm、器高１cm前後の浅いものと、口径13cm、器高３cmのやゝ大形で深いものの二種がある。いずれも手づくりで前者は口縁部が平坦でない。白灰色もしくはやゝ黄色味をおびた灰色を呈し、胎土は緻密である。118はロクロ製品で、糸切り痕をのこし、後述の山皿に似ている。黄茶褐色を呈し胎土は緻密である。

小形鉢（119）　口径８cm、器高４cmの小形品で、口縁部が僅かに外反する。白っぽい黄灰色を呈し、胎土は灯明皿とかわらない。

鉢（135）　口径40cm、器高10.5cm、底径20cmの大形の鉢である。口縁端部は内側に押えつけられ、幅２cmの平坦となる。器厚８mmの厚手であるが、底部は４mmの薄手である。口縁部はナデツケ、胴部は押えで、底部のみ内外面ともヘラケズリしている。淡褐色を呈し、胎土には細砂を多く含む。

山茶椀（120～128）　いずれも口径16cm、器高６cm前後のものである。口縁部が底部より真すぐ外方に立ちあがるものと、高台部分よりやゝ外に張り出して立ちあがる丸味をもったものがある。いずれも糸切りのままで、そのあと高台を貼付けている。この高台の内側に、墨書が施され

ているものがある。120・127には「ℓ」が、126には「X」が、128にも墨書が施されているようであるが判読出来ない。高台のみの破片であるが、他に墨書されたものが数点あり、それらには「大」や「X」「井」等が書かれている。口唇部には自然釉が見られるものがある。胎土には多くの砂粒を含んでいる。

山皿（129～134）　口径９～10cm、器高２cm足らずの小形の皿である。いずれもヘラ切りのままのものである。胎土は山茶椀と同じである。

鉢（136～139）　136は口径18.5cm、器高8.3cmの小形の鉢である。底部より口縁部まで屈曲せずに真すぐ外方にひろがる。底部はヘラ切りのままで、ヘラ切りは底部の外側にも１cm程度およんでいる。やや黄色味をおびた灰色を呈する。137は口径30cm、器高12cmの高台付の大形鉢である。口唇部が丸く仕上げられ、器厚８mm程度である。ヘラ切りのあと、やや高い高台を貼付けている。口唇部の一部と高台の内側には自然釉が見られる。また内面はすりへった状態である。白灰色を呈し、砂粒を多く含んでいる。

138～139は片口鉢である。138は口径32cmで口縁部が僅かに外反するが、これに対し、139はゆるい傾斜で内弯気味に立ちあがる。器厚１cm。片口は幅３～４cmで、138の口唇部には自然釉が見られ、139の内面はすりへった状態となる。いずれも胴下半部がヘラケズリされている。くすんだ灰色を呈し、砂粒を多く含む。

常滑焼壺（140～142）　140は口頸部が直立し、先端部が丸く外方に折れまがる。肩部が大きく張り出して胴部につづく。表面は赤っぽい茶褐色を呈し、内面は青灰色、砂粒を多く含み肩部は火が強くあたり、砂粒が表面に出ている。141・142は胴下半部の破片である。いずれも淡い黄緑色の釉が胴上部より流れるように見られる。底部内面にも同様の釉が見られる。地は暗茶褐色である。141の胴下半部には三条の沈線が施されている。

常滑焼甕（143～148）　143は口径21.5cm、器高36cmの完形の甕である。口縁部先端がつまみあげられる状態となる。頸部より肩部にかけてはゆるいカーブを描き胴部につづく。胴部最大幅は胴上部にあり径35cm、底径は12.5cm、器厚は1.0cmで底部のみ薄く７mm程度である。全面茶褐色を呈し、口縁部はヨコナデ、胴下半部はヘラによるナデツケで、肩部には淡い黄緑色の釉があつくかかっている。144～147はいずれも口縁部が一旦下方に折り返えされ、再び上方に打り曲げられる常滑焼の特徴的な口縁部をもつものである。口縁端部の幅は144のように1.3cm程の狭いものや、147のように3.5cmもあるものもある。145は口径34cm、口縁部内側に段状部分を有し、口縁部外側はナデツケで肥厚する。肩部より胴部にかけては真すぐ下がる。この部分はヘラによる押えと思われる粘土のあとがのこる。また肩部にはヘラによる「X」印が大きく描かれている。内面の頸部より下は余分な粘土を横方向にケズリとった痕がのこり、凹凸がはげしい。赤っぽい茶褐色を呈し、白い砂粒を含む。148はこの種の甕の胴下半部の破片である。器形の大きさに比して薄手で

ある。表面はヘラによるナデツケで、底部は指の押えによる大きな凹みが見られる。内面はうすい刷毛目状が横方向に見られ、指による小さい押えがめぐっている。うすい褐色を呈する。

	遺　構	遺　物　番　号
飛鳥奈良時代	S B 15	27 59 60 64 65 66
	S B 36	30 55 74 77
	S K 44	39 82 83 100
	S K 62	37 73 80 85
	S B 67	33 49 51 57 68 69 70 71 87 92 93
	S B83～85	35 40 62 86
鎌倉時代	S X 2	104 110 111 113 150
	S D 4	109 119 122 140 141
	S D 86	106 107 121 124 126 129 133 134 138

第３表　遺構別遺物一覧表

以上の土器の他に青磁、白磁の破片が出土している。多くは包含層の出土である。青磁は総数54点ある。いずれも椀形土器の破片で色調によって三種に分けられる。濃い青色を呈するもの、緑色に近い青色を呈するもの、水色に近い青色を呈するものである。胎土は堅く緻密で、高台の部分を除いて全体に厚く釉が施されている。釉の下に花弁が彫られているもの、内面に「斉」の刻印のあるものがある。白磁は４点ある。鉢形土器の破片である。高台はヘラケズリされている。内側に沈線が一条めぐる。やや青っぽい白い釉がかかっている。（ＰＬ22）

6　その他の遺物

○大形蛤刃石斧（149）

弥生時代溝址ＳＤ37から出土。刃部のみの破片である。幅5.5cm、厚さ2.8cm。刃部の角度は70°。青緑色を呈する。硬砂岩製。

○和　　鏡（150）

鎌倉時代墳墓ＳＸ２から鍋、灯明皿、宋銭の破片とともに出土。径10.8cm、厚さ２mm、縁高５mmの銅製円鏡である。紐は素紐で高さ３mm。界圏はなく、鏡背文様は２本の草花とその上部に飛雀を２羽。３匹の蝶を絵画的に描き出している。（ＰＬ10・20）

○砥　　石（151・152）

いずれも一部を欠損している。151は幅５cm、厚さ2.5cm、長さ９cmで、四面ともよく使用している。152は幅7.2m、厚さ1.2cmと薄手である。

以上の他に宋銭が２点ある。ＳＸ２およびＳＥ45から出土。小片であるが「開元通宝」と思われるものである。

Ⅳ　プロトン磁力計による磁気探査

昭和48年12月末、斎王宮跡の初年度の調査に先立ち、プロトン磁力計による磁気探査によって地下遺構の確認をすることとなった。これは大阪府教育委員会の協力を得て行なった。その際、斎王宮跡の現地で行なう前に、地下遺構が明らかな個所で、プロトン磁力計の効果をみることになった。そのため、まず古里遺跡のＢ・Ｃ地区の中間地点で行なうことにした。

古里遺跡Ｂ地区で見つかった鎌倉時代の大溝はＣ地区にまでつづいており、この大溝は祓川より旧竹神社の北を通って東北東に向って走っている。Ｂ地区では東端部分を完掘していないが、中央部では幅2.8m、深さ2.7mのＶ字形を呈している。Ｃ地区の大溝も形状規模は同様である。Ｂ・Ｃ両北区の間は幅31mに亘って未発掘地区である。この未発掘部分の中間点で南北に測点を設定して、探査を試みた。その結果がＰＬ11である。それによると、１・２・３・８・９は測定値が高い。平均測定値は46025.8γ以上であり、これに対し、４～７は低く、平均測定値は46019.1γ以下であり、４～７の範囲（幅２ｍ）とその両端の次の測定点３と８の差より3.0±0.5ｍという結果を得た。この数値は古里遺跡Ｂ・Ｃ地区の発掘結果とほぼ一致する。

以上は大阪府教育委員会文化財保護課技師中村浩氏、大阪大学基礎工学部河合研究室鳥居雅之氏によって調査報告されたものである。記して謝意を表したい。

V 結　　語

本年度の古里遺跡の調査は、すぐあとに斎王宮跡の調査をひかえていたために僅か40日間で終った。調査面積は約2300㎡である。その結果、弥生時代溝址２、壺棺１、飛鳥奈良時代竪穴住居址11、掘立柱建物址14、土坑、溝址、鎌倉時代溝址、土坑、墓坑、井戸等多数の遺構を検出した。これらの遺構に伴って各時代の遺物の出土も多い。

これまでの調査で弥生時代の明確な遺構としてはＣ地区の住居址がある。中期の竪穴住居址で、径６ｍの円形である。今回、検出した溝址は如何なるものか不明である。当遺跡では弥生時代各期の土器片が各所から出土している。南方800ｍの個所には著名な金剛坂遺跡がある。金剛坂遺跡は縄文時代後期、弥生時代各時期の複合遺跡で、方形周溝墓もあって、当地域最大の遺跡である。特に古里遺跡からも出土している前期新の土器が多数あり、弥生時代開始の諸問題を含んでいる。また前期の土器片は神前山古墳の墳丘内からも出土している。祓川の沖積地を臨む台地縁辺には弥生時代を通じて、金剛坂遺跡を中心として、小規模な遺跡が散在しているのであろう。

今回も飛鳥奈良時代の掘立柱建物址を15棟検出した。Ａ地区で３棟、Ｂ地区で25棟、Ｃ地区で10棟あり計53棟となる。Ｄ地区での15棟のうち柱掘り方の比較的しっかりとしたものは10棟近くある。その中でも特にＳＢ80は一辺80～100cmの大形で、深さも四隅のみ100cm以上で、他の柱穴より一段と深く掘られている。その上、建物内部西寄りの部分より蹄脚硯の破片が出土している。今回発見した建物址の棟方向は一定でない。ＳＢ80はＮ84°Ｅで、これに近い値をするものはＳＢ49のＮ70°Ｅがあるのみで他は大きく異なる。他地区ではＢ地区に２～３棟あるのみである。棟方向が一定でないことはＢ地区でも同様である。たゞＣ地区に於いては、10棟がＮ18°ＥからＮ35°Ｅの間にふくまれ、比較的整然と並んでいる。蹄脚硯の出土より、以前から述べられているように古里遺跡は官衙的性格が予想されるのであるが、建物の棟方向が雑多であり、官衙とは考え難い面もある。

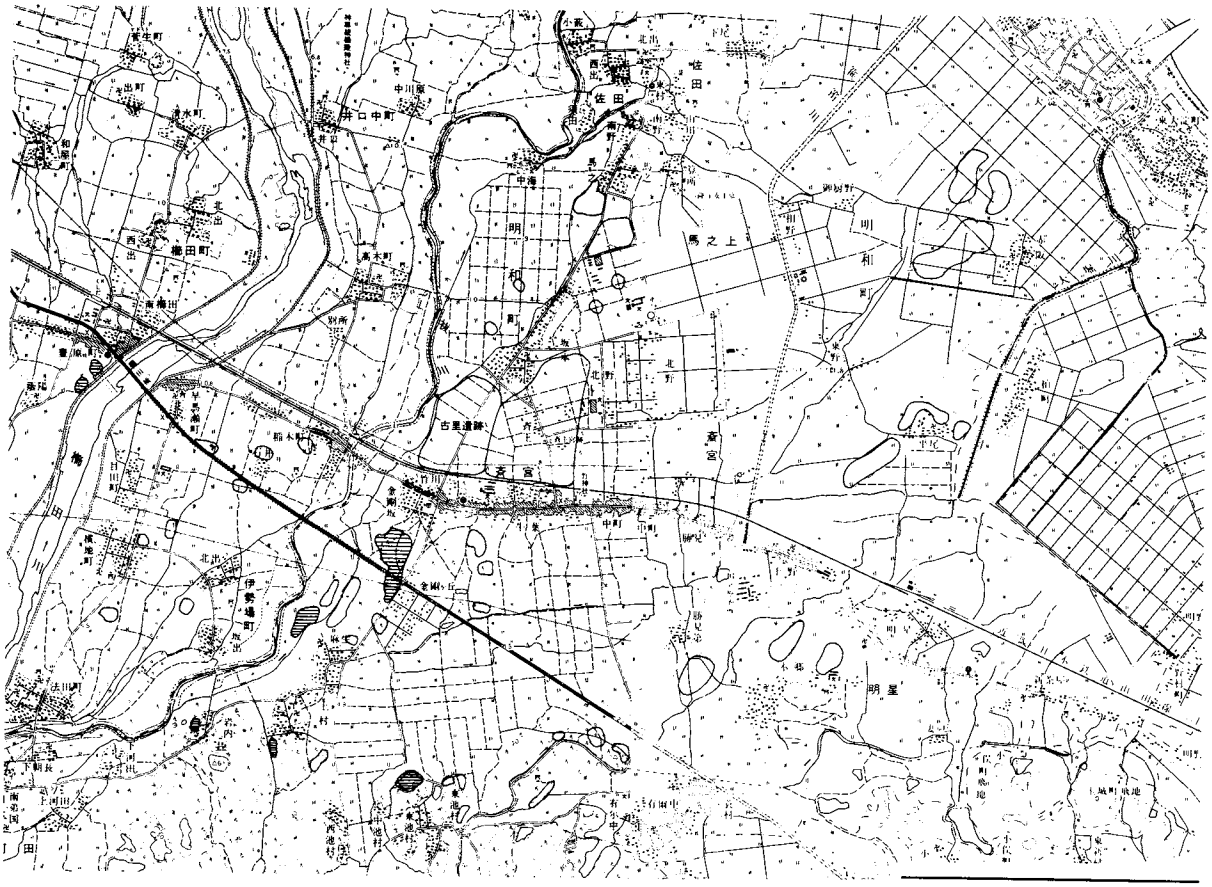
一方、竪穴住居址はＡ、Ｂ地区では検出していないが、Ｃ地区で８戸、今回のＤ地区で11戸検出している。11戸の住居址は最大28㎡最小11.4㎡で大きさは種々ある。長軸方向はＮ42°～43°Ｗのものが５棟あり、カマドは全て東壁南寄りに作られている。これらの竪穴住居址は先述の掘立柱建物址と重複している個所もある。その先後関係はＣ地区同様、竪穴住居址の方が古そうである。住居址内から出土した土器はいずれも８世紀初頭に比定し得る。

今回も鎌倉時代の遺構、遺物を非常に多く検出した。Ａ地区では室町時代のものが多く、Ｂ地

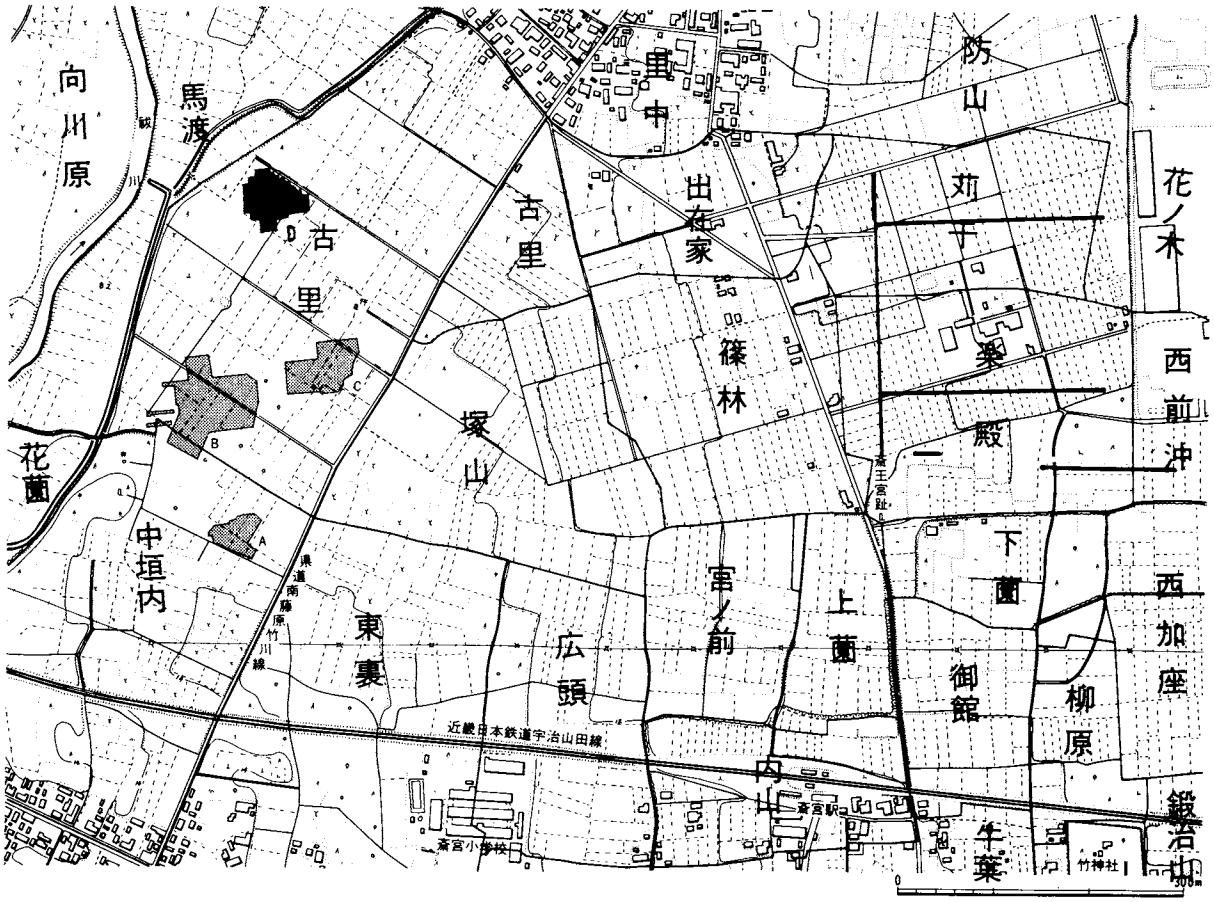
区では鎌倉、室町両期のものが、C地区では鎌倉時代のものが比較的多く出土している。南に行くに従って室町期のものが多くなるようである。このあと、ここの人々は現在の竹川部落へうつっていったのであろうか。鎌倉時代の遺構で土坑、墓坑、井戸等に比べて、溝址やpitについてはそのまとまりが不明確であるため、性格は判然としない。特に小さなpitは非常に多く見られるが、建物として規格性をもった配列とならない。これは中世の建物の構造、構築方法が従来と異なるためであろうか。溝址についても同様である。並行して走る数条の溝址は道路の側溝であり、それが重複しているようにも考えられる。また、比較的方形に巡る溝址は集落の一つのブロックごとに区画する溝かとも考えられる。このような方形に巡る溝址は他地区に於いても見られる。今回の調査に於いても6基の井戸を確認した。いずれも完掘出来なかった。井戸はA地区1基、B地区7基、C地区8基見つかっており、合計22基となる。井戸の数が多いことや、SE47～48のように近接してある場合もあり、他の遺構との関連も不明瞭で、その在り方は規則性はないようである。これらの井戸の中には礫が上部につまったものもあり、鎌倉期以降の開墾時まであいていた井戸もあったと思われる。先述した墓坑であるが、宋銭、和鏡、鍋、灯明皿等を副葬していたSX2は明らかに墓坑と考えられる。しかし、他の墓坑としたものはSX2に比べ細長く、深く、遺物の出土もなくSX2とはやや異なる。また、殆んどが溝址に近接していることも気になる。B地区に於いては火葬址を検出している。

遺物で注目されるのは墨書土器である。今回約20点が出土し、従来のものを含めると相当の数になる。全て山茶椀の底部にかかれるもので、他の器形はない。明らかに文字と思われるものは少ない。記号あるいは目印といったものである。

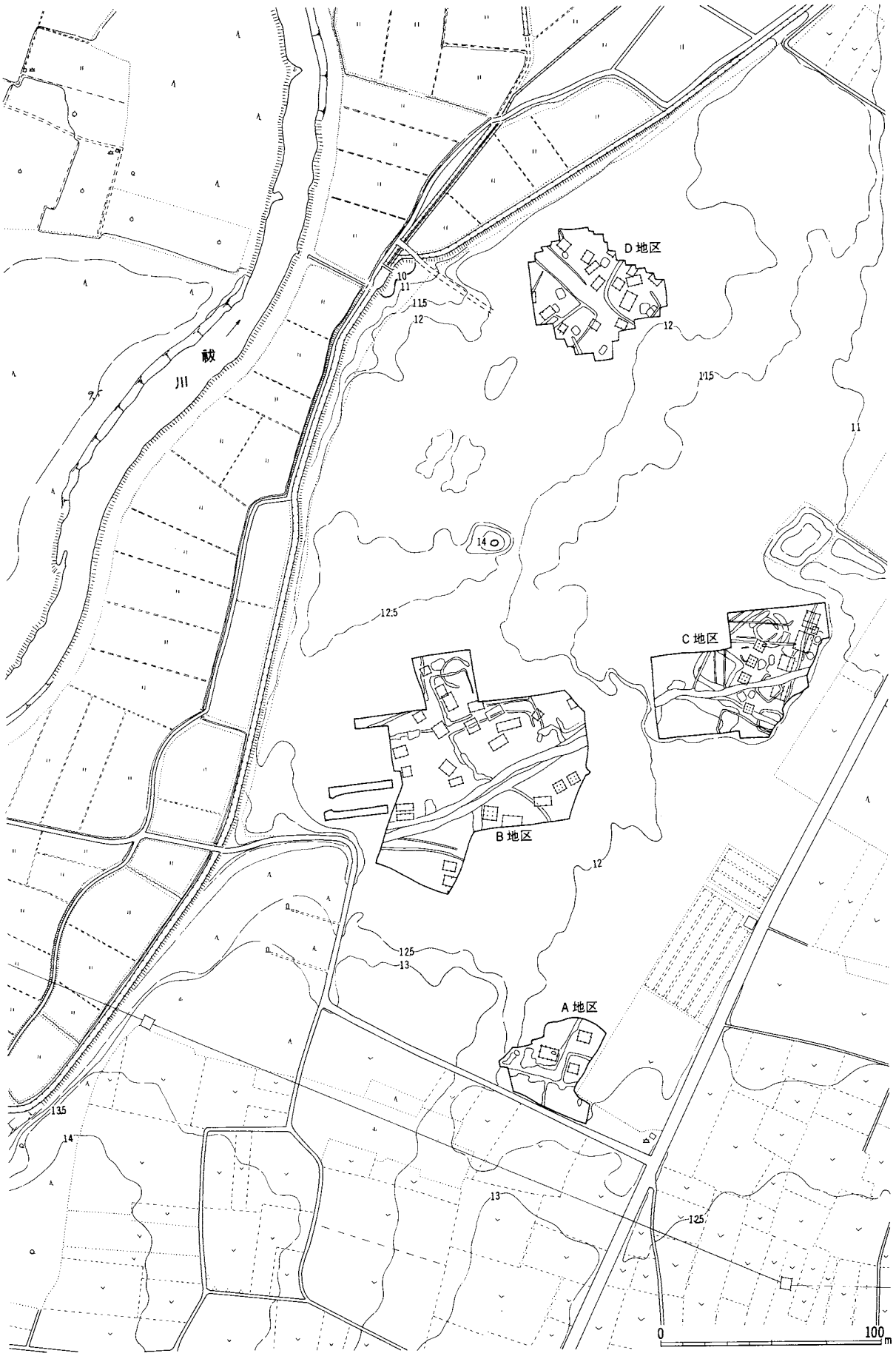
図　　版



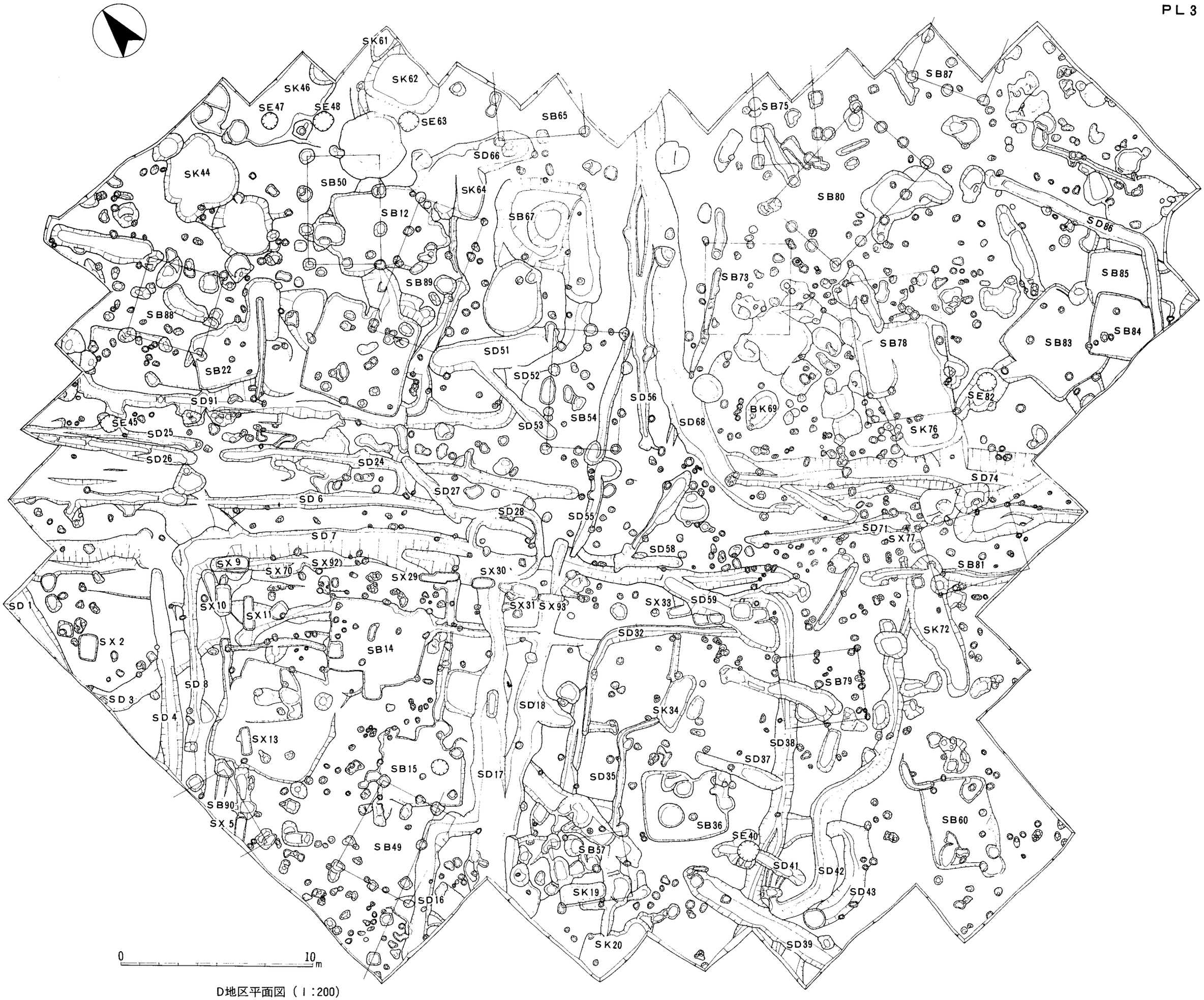
古里遺跡位置図（1：25000　松阪　明野　国土地理院）横線；弥生時代遺跡　○印；古墳時代以降遺跡



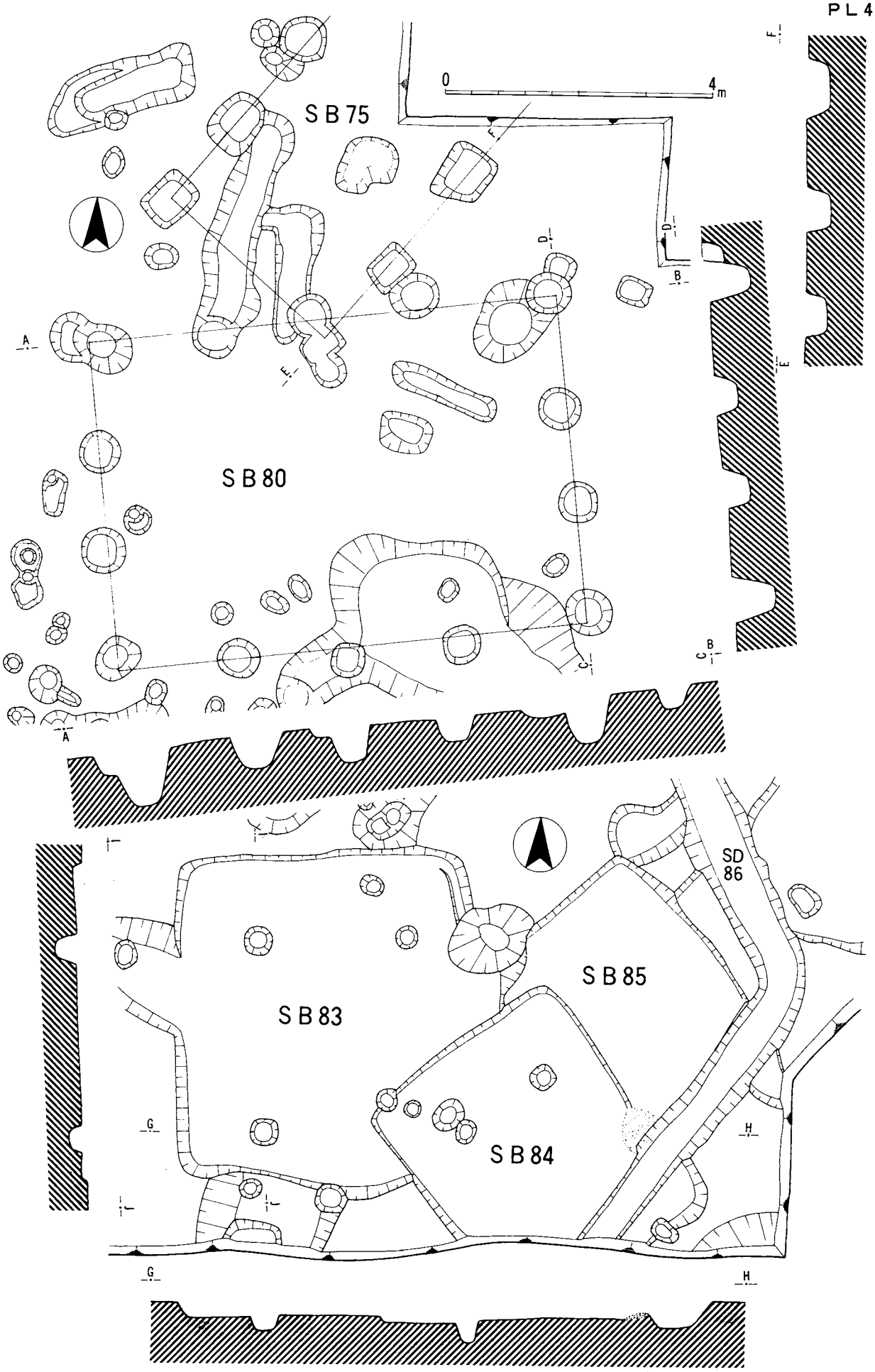
古里遺跡地形及周辺小字名図（1：7000）



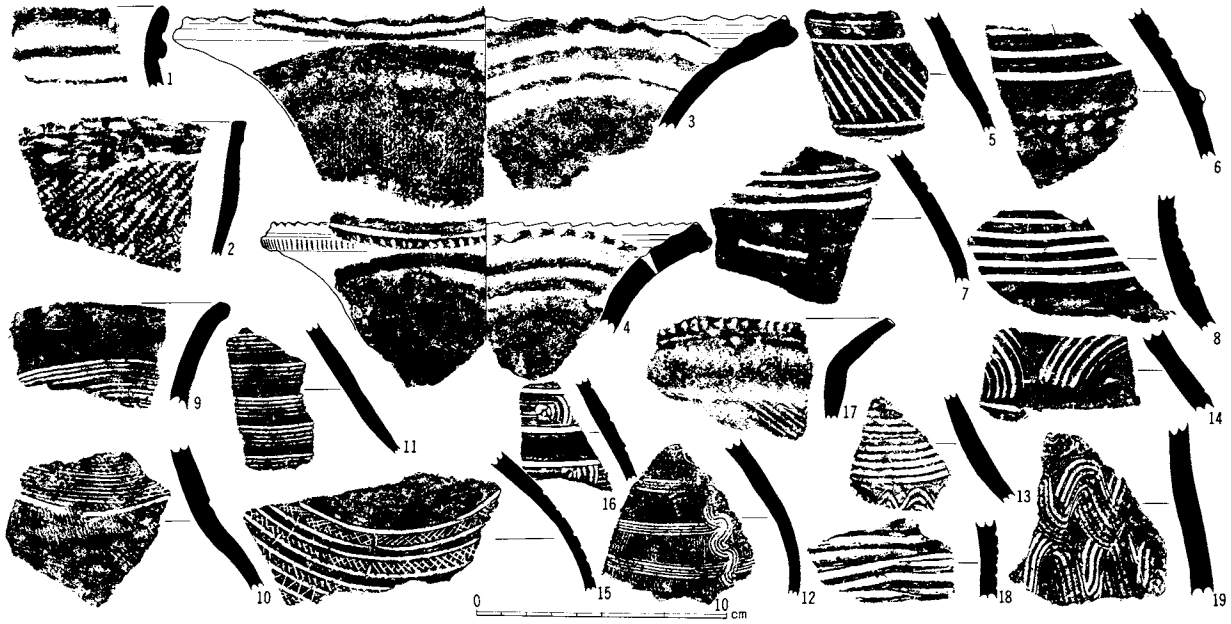
古里遺跡発掘区配置図（1：2500）

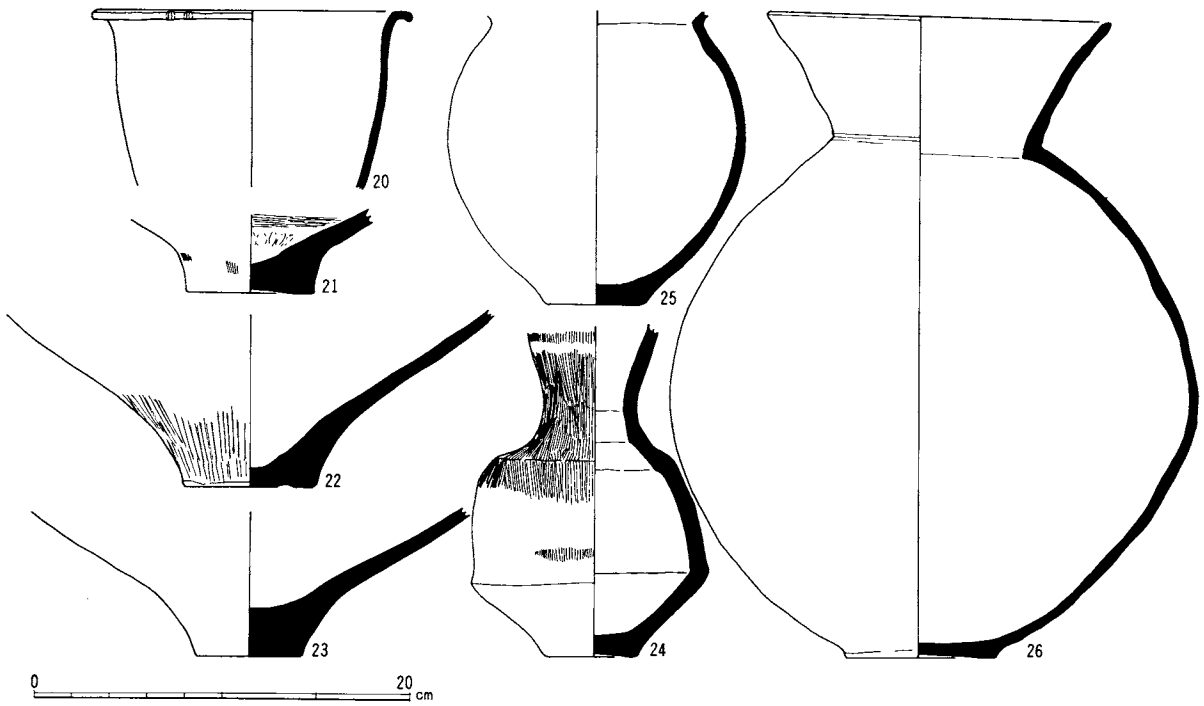

SK61
SK62
SK46
SE47
SE48
SE63
SB65
SB75
SB87
SK44
SB50
SD66
SK64
SB12
SB67
SB80
SD86
SB73
SB85
SB89
SB88
SB78
SB83
SB84
SD51
SB22
SD52
SD91
SE82
SD56
BK69
SE45
SD25
SD53
SB54
SD68
SK76
SD26
SD24
SD74
SD27
SD6
SD28
SD55
SD71
SD7
SX77
SD58
SX9
SX70
SX92
SX29
SX30
SB81
SD1
SX10
SX11
SX31
SX93
SX33
SD59
SX2
SB14
SD32
SK72
SD8
SB79
SD3
SD18
SK34
SD4
SX13
SD38
SD37
SB15
SD17
SD35
SB90
SX5
SB36
SB60
SB49
SE40
SB57
SD41
SD42
SK19
SD43
SD16
SK20
SD39
0
10m

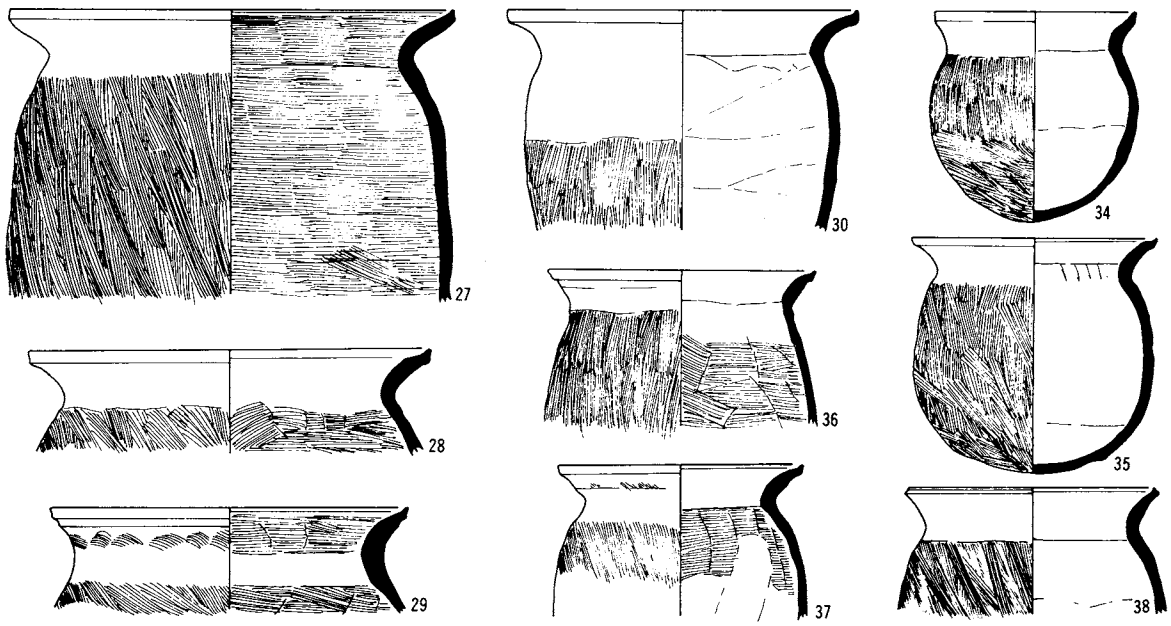
D地区平面図（1:200）



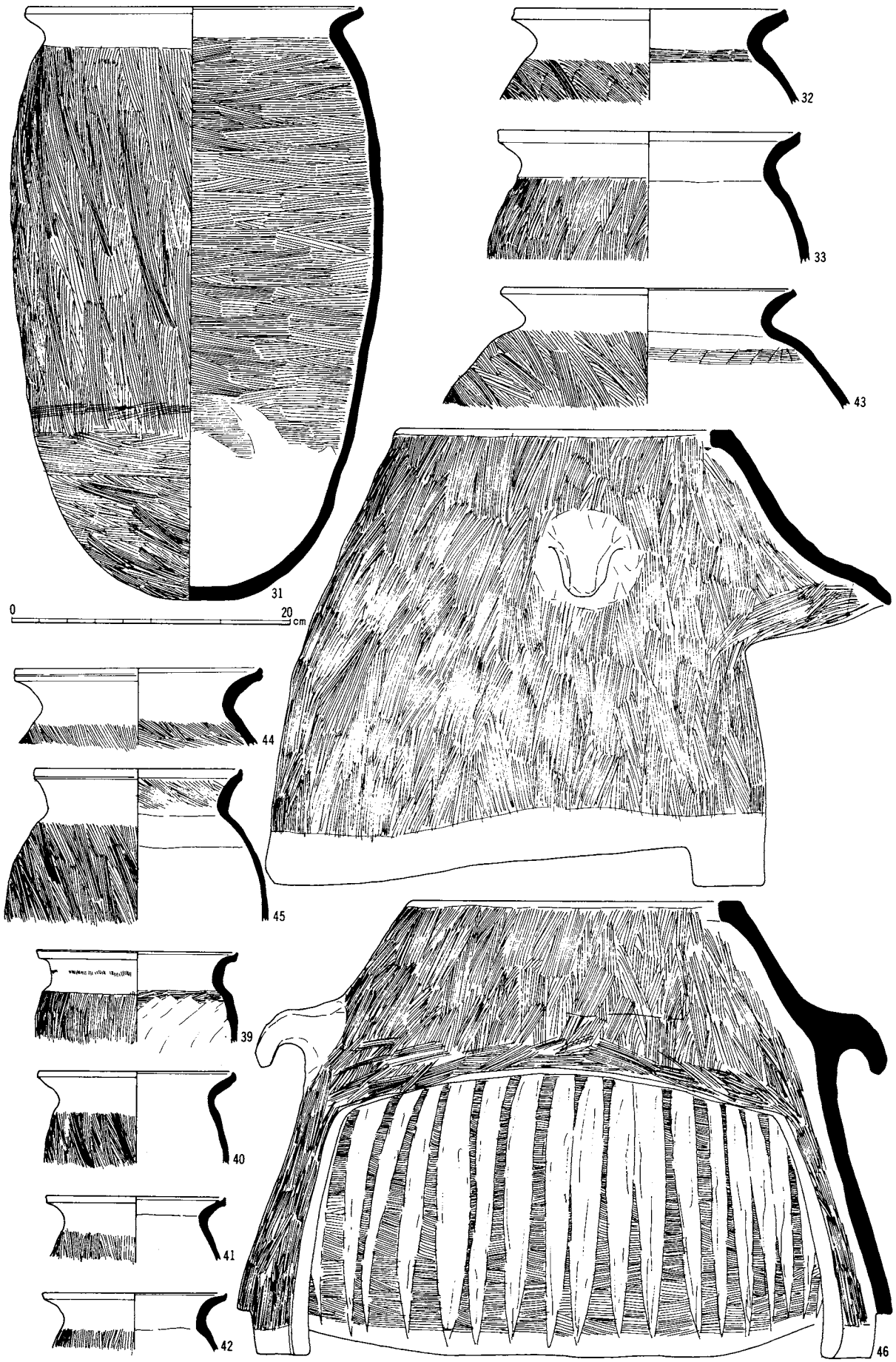
SB75・80：SB83・84・85実測図（1：80）断面図基準線：12.6cm



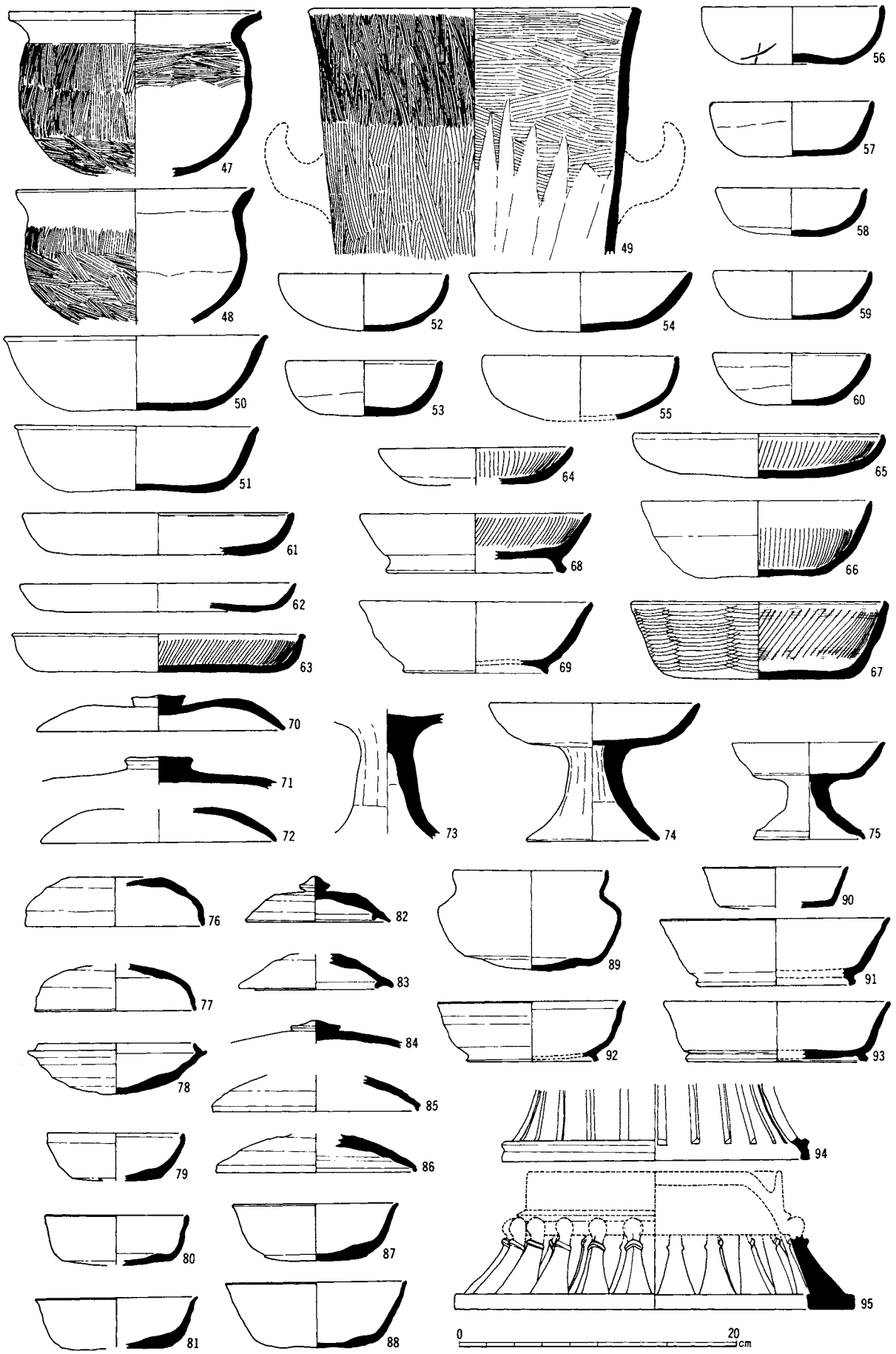




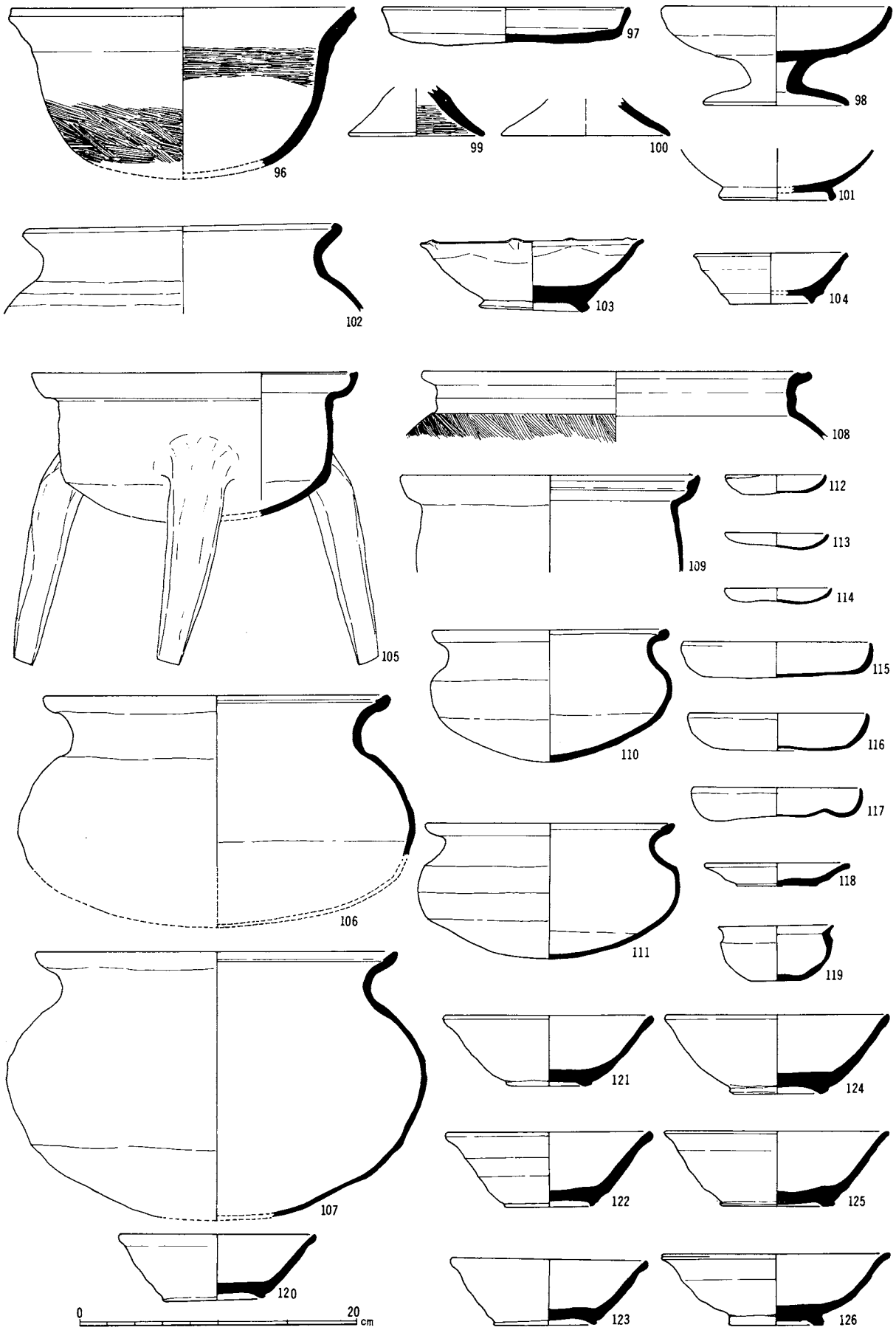
弥生式土器拓影（1：3）・飛鳥奈良時代土器（1：4）



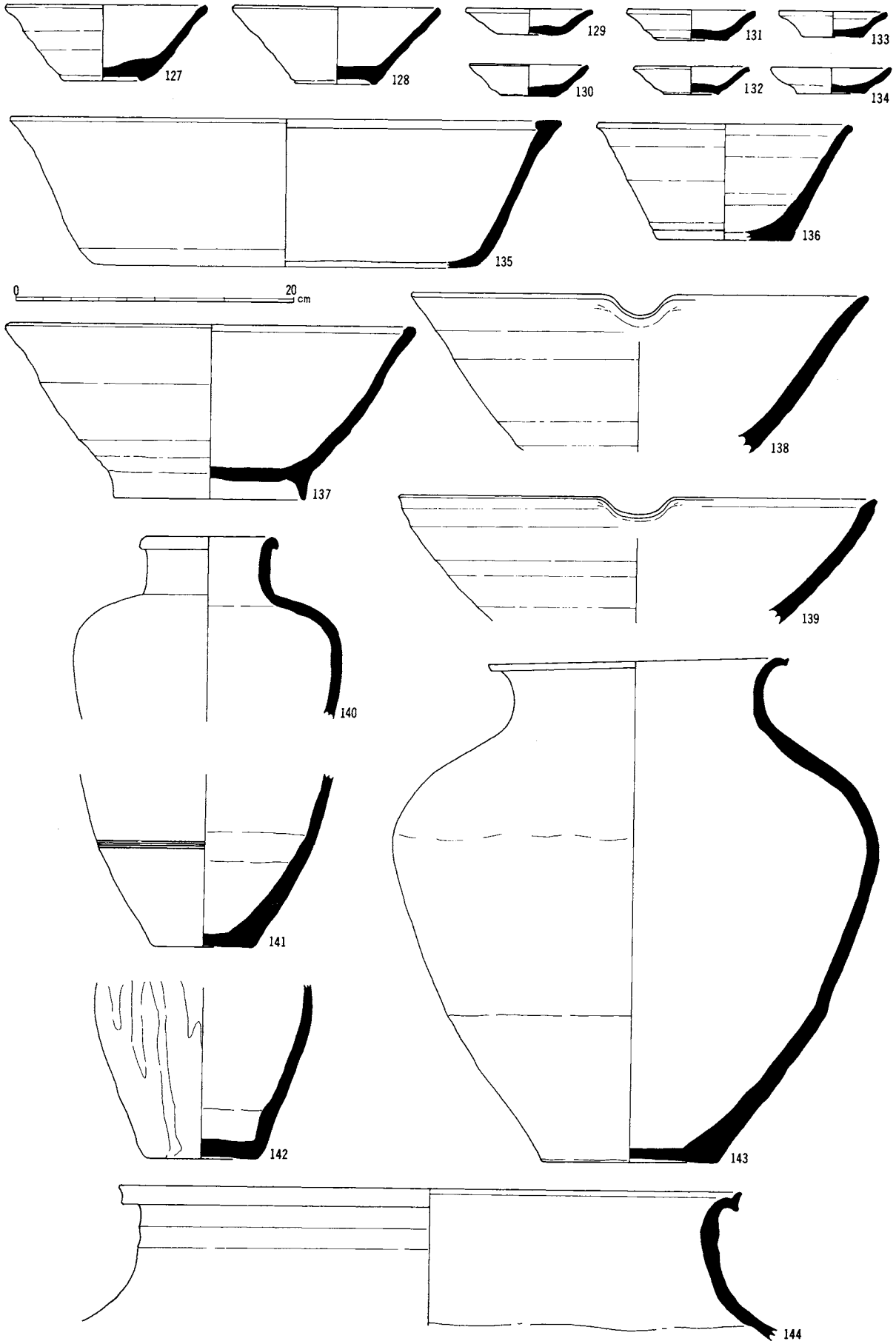
飛鳥・奈良時代土器（1：4）


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
0
20
cm

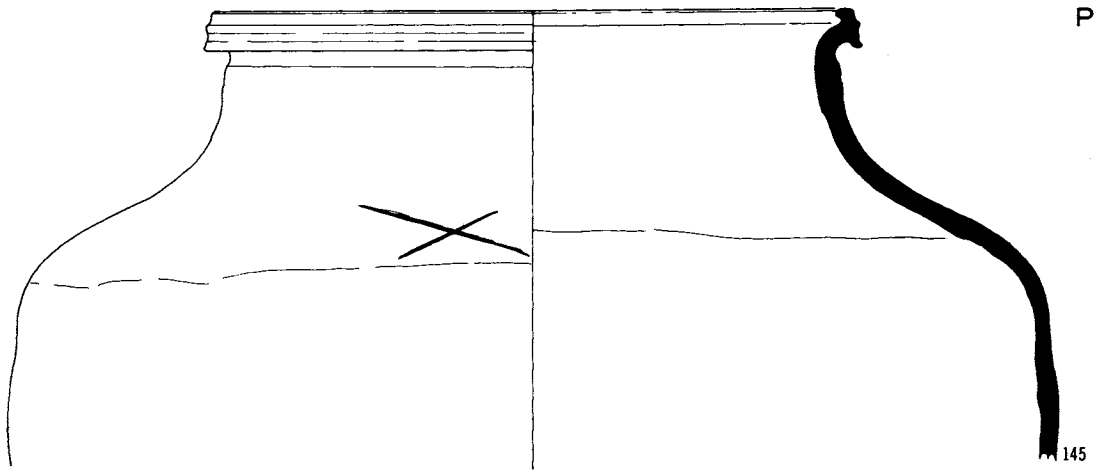
飛鳥奈良時代土器（1：3）

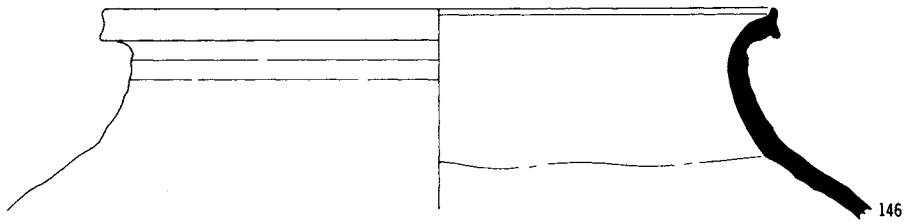


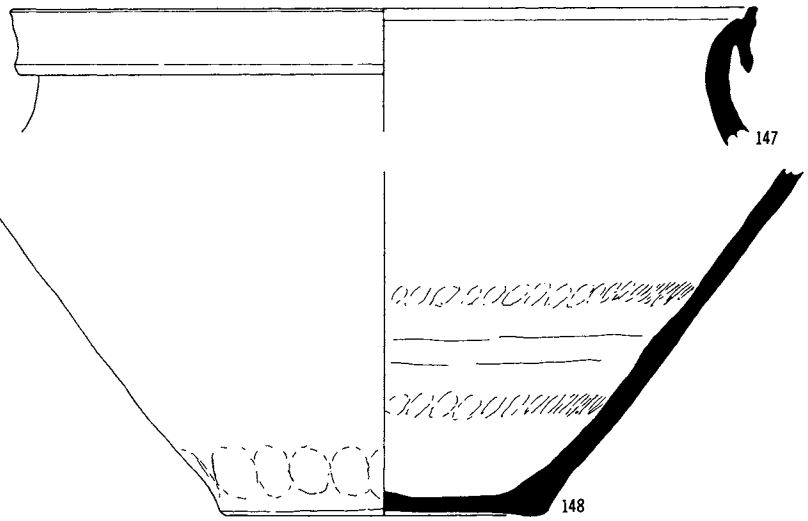
平安時代、鎌倉時代土器（1：4）

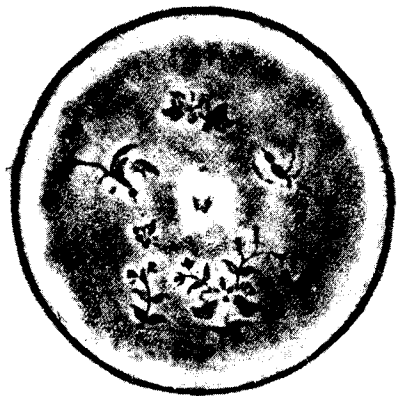

127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
0
20
cm
137
138
139
140
141
142
143
144

鎌倉時代土器（1：4）



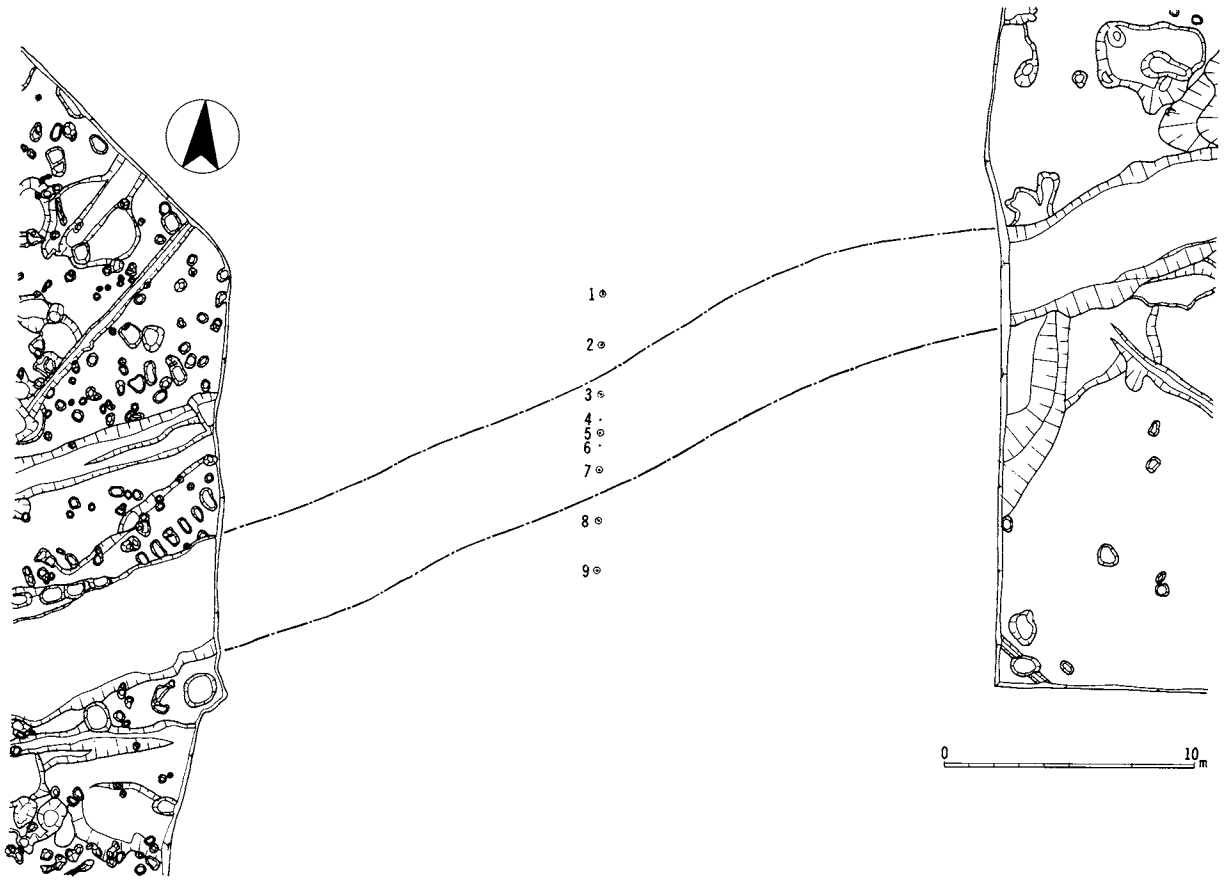


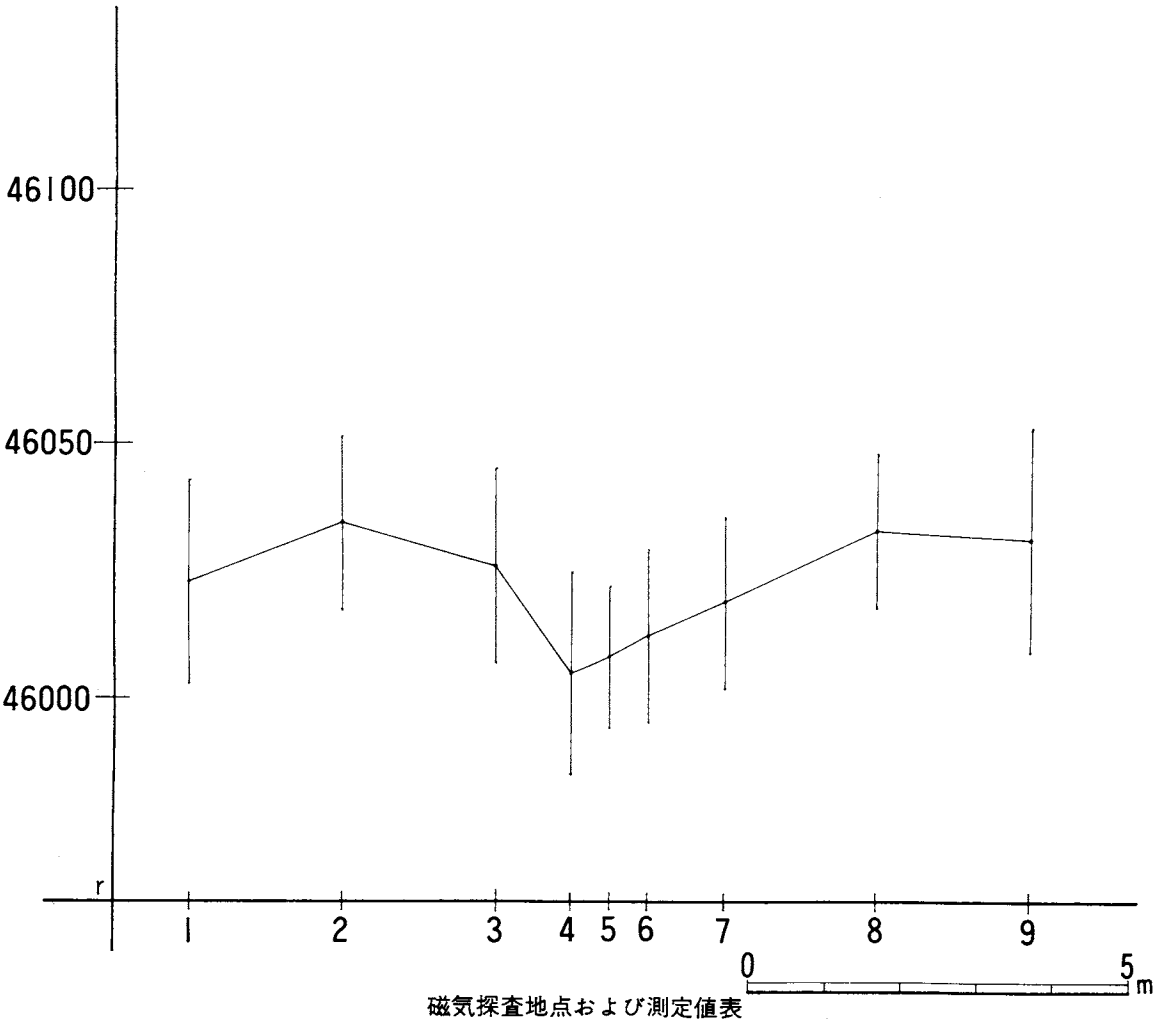




0 10cm

鎌倉時代土器（1：4）・和鏡（1：2）





磁気探査地点および測定値表

発掘区近景（南側）

発掘区近景（北側）

S B 60

S B 83・84・85

S B 80

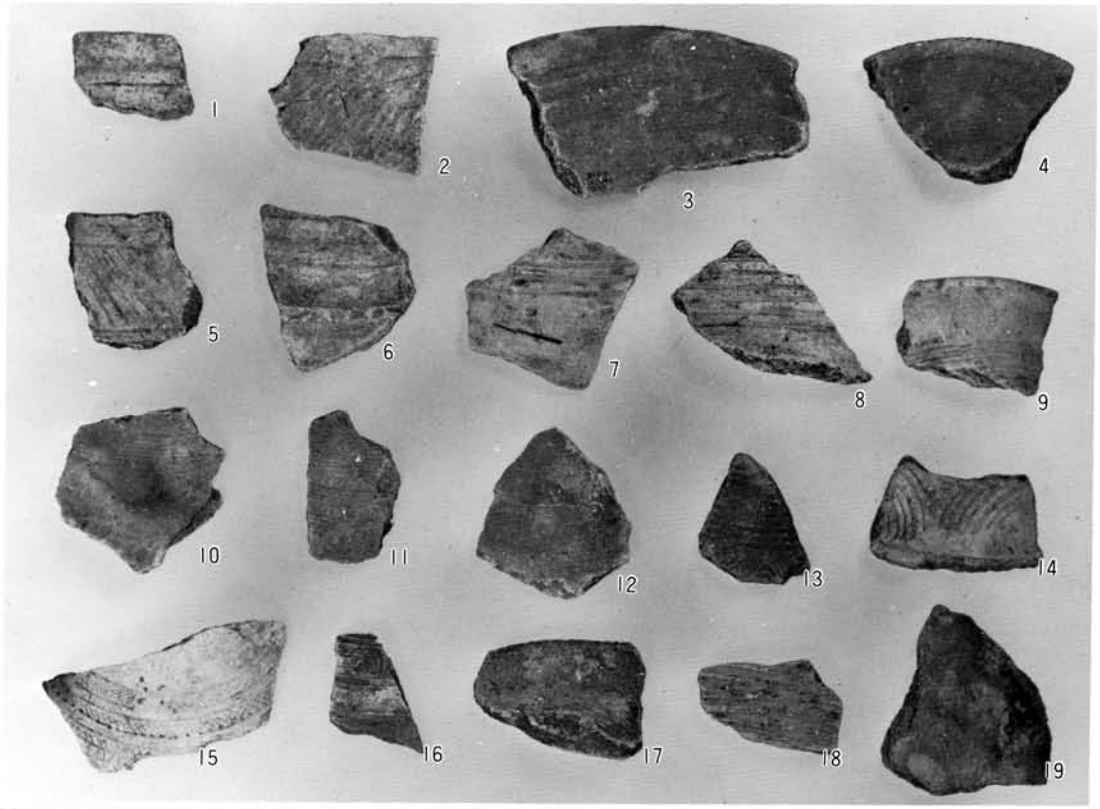
S B 54

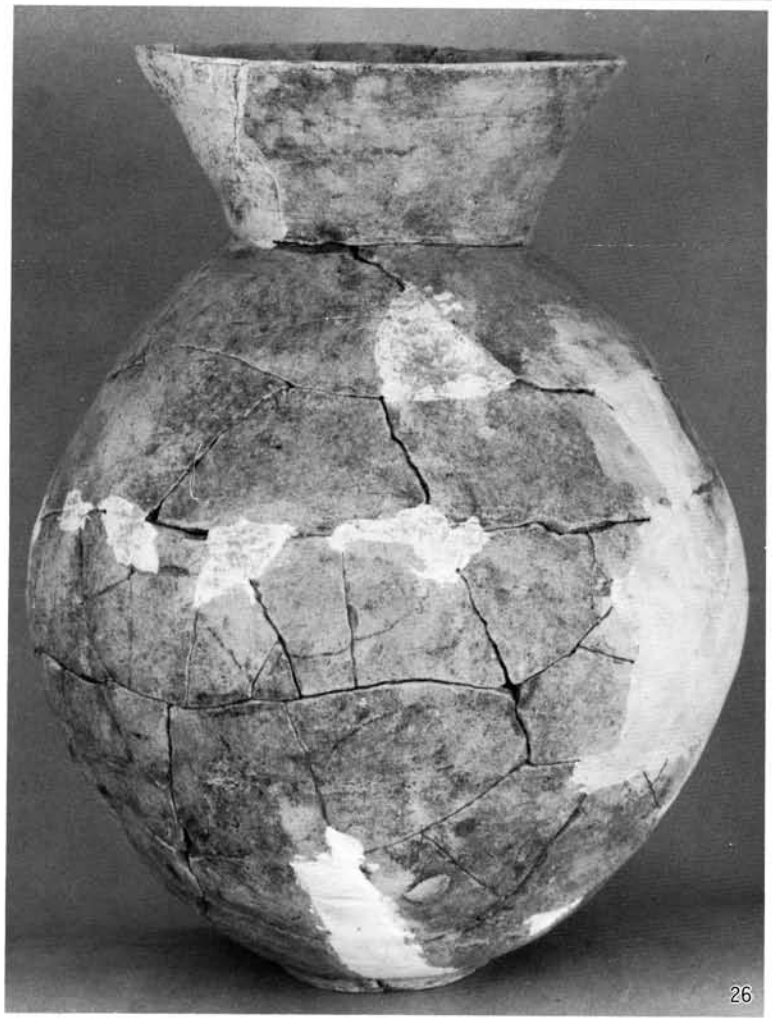
S X 77

S X 2

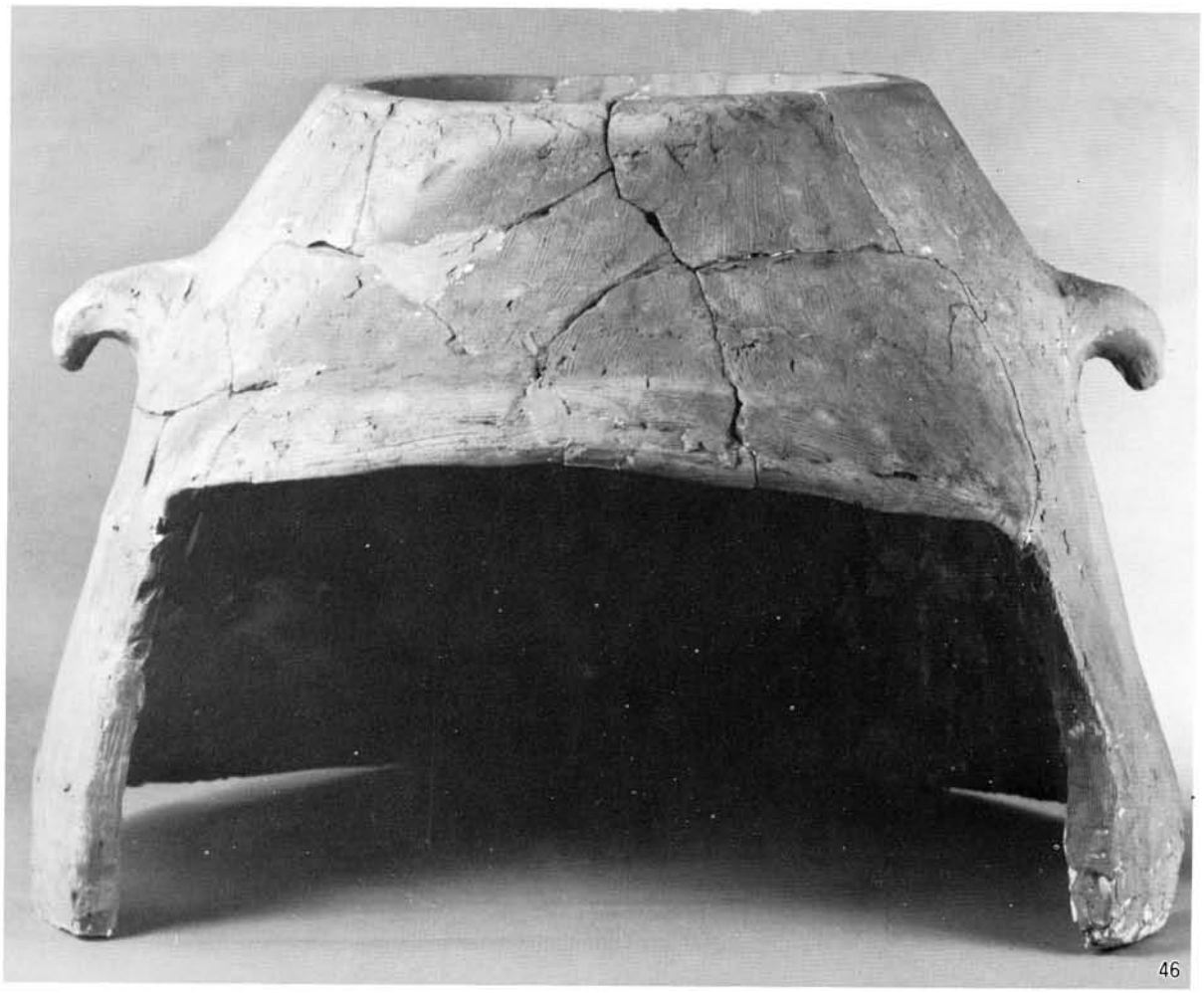
S D68・71

S D42・43

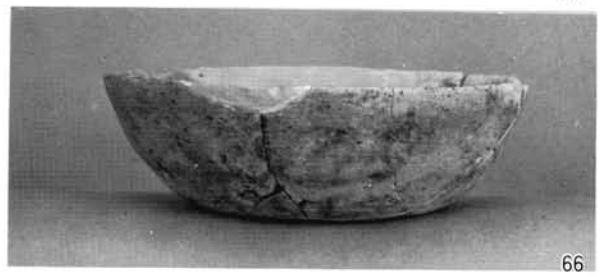


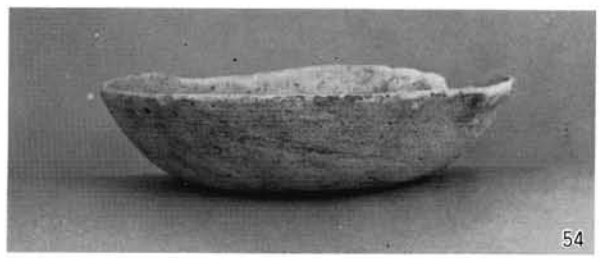


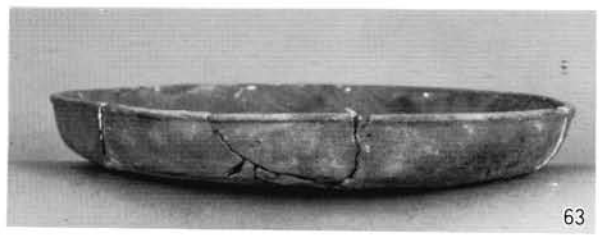
弥生時代土器（1：3）

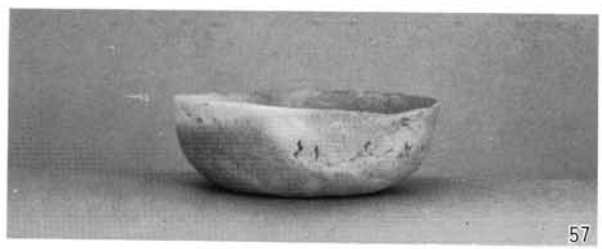


飛鳥奈良時代土器（1：3）

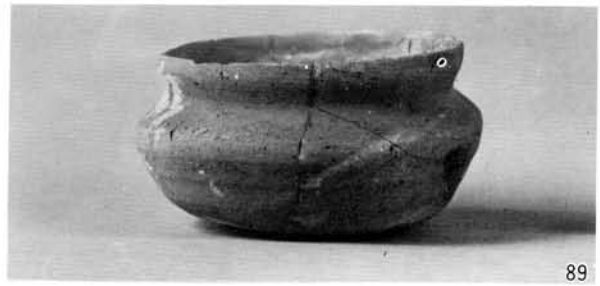


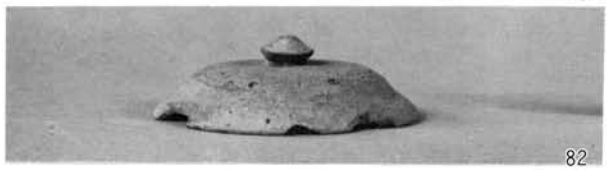


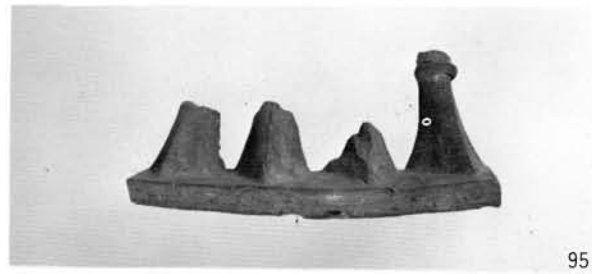


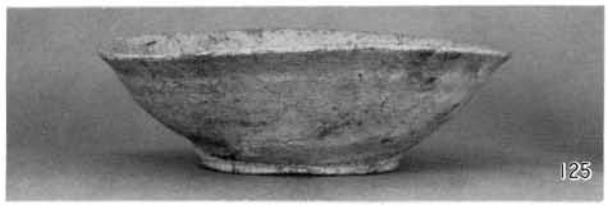


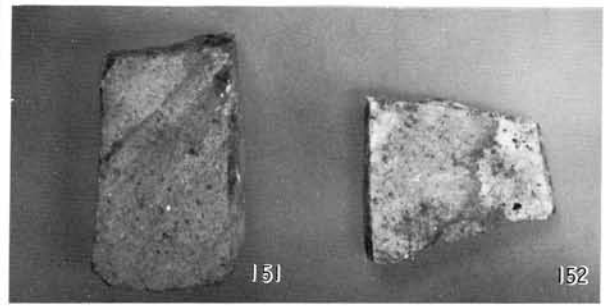
飛鳥奈良時代土器（1：3）



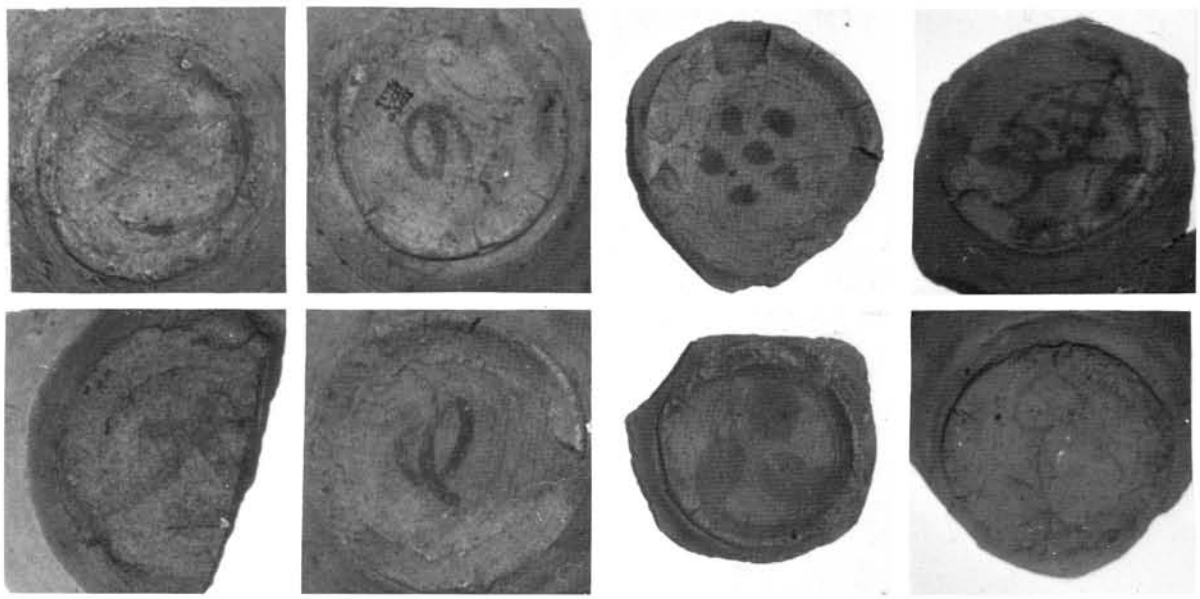




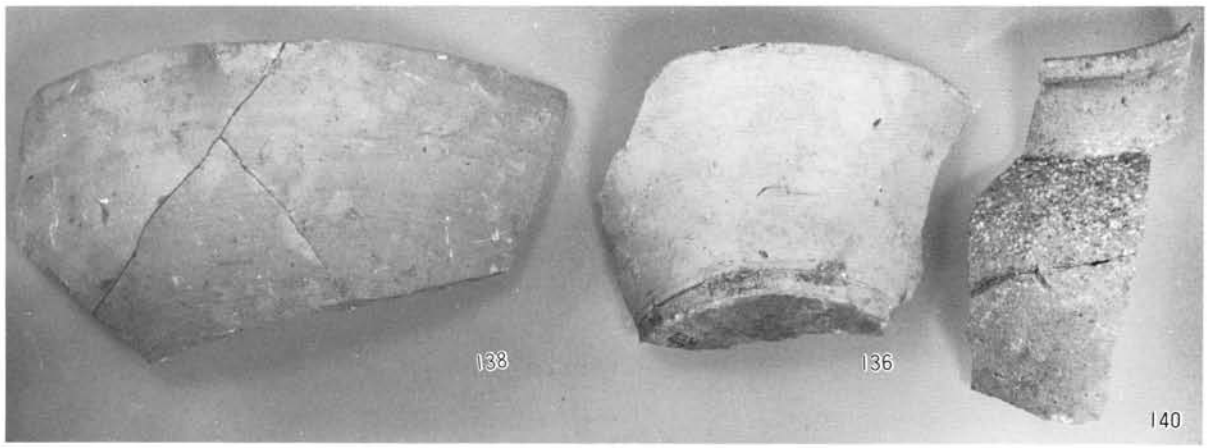


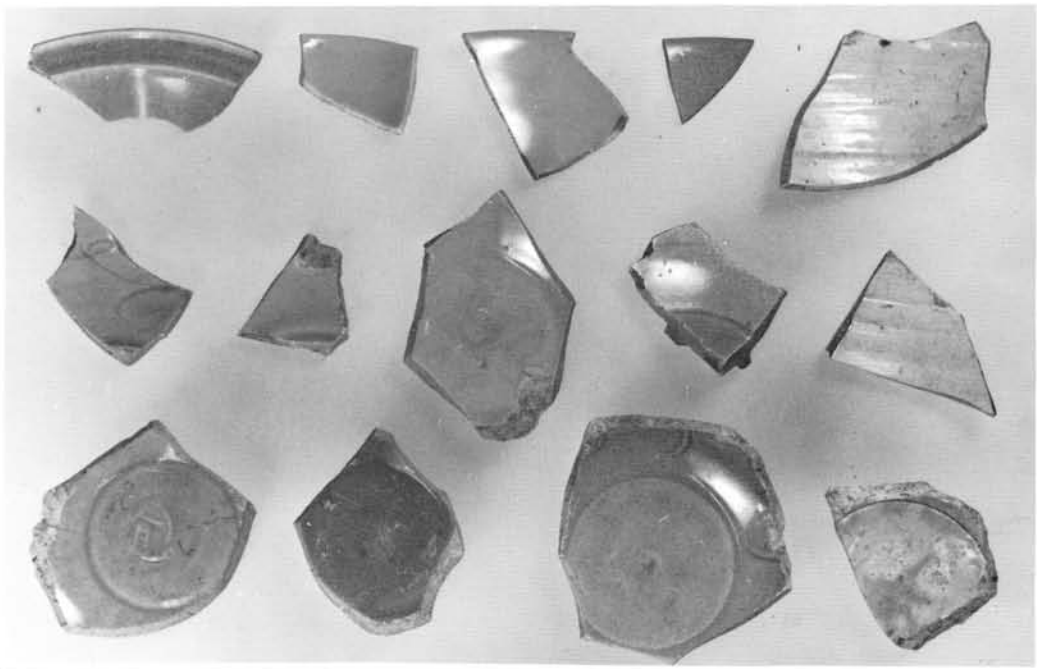


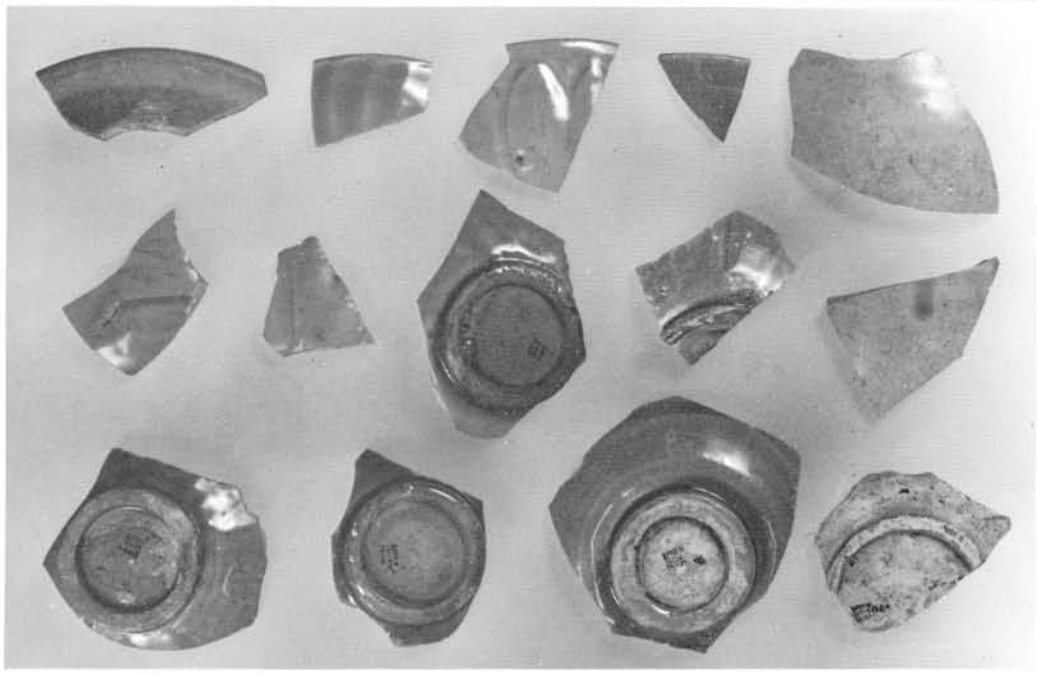
飛鳥奈良時代土器、鎌倉時代土器　和鏡　石斧　砥石（1：3）



鎌倉時代土器（1：3）　墨書土器







鎌倉時代土器（1：3）

昭和49（1974）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　22

古里遺跡発掘調査報告―Ｄ地区―

1974年３月31日

編　集　三重県教育委員会
発　行　三重県教育委員会
印　刷　オリエンタル印刷株式会社